

クロスロード



特集 1

商業・観光分野の活動ポイント

特集 2

「定着可能な技術」を見極める



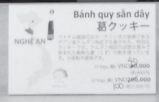
Kudzu cookie
from Hometown of Ho Chi Minh

菓クッキーは、福島県二本松市の菓子職人松本充久、JICA青年海外協力隊山田科永（ヘリテージ・ツーリズムによる辺境農産物の生計多様化プロジェクト）、Vietnamese Rural Industries Research and Development Institute (VRI) をして、おなごのワイルドアンティグワゴーター（以下おなご）をスキャンしていただいた支援の下、開発されました。

松本充久氏は、福島県二本松市のお菓子屋「菓子坊まも」との菓子職人です。江戸時代の創業以来、世代に渡って伝統の味を継承するのみで、まんじゅうは、第2回全国菓子大博覧会で大賞賞を受賞しています。

生産地住所：
クアンナムタン郡ナムアン村

ホットライン 0169 697 3138 (Ms. Thuan)
購入のお問合せを含む各種情報につきましては、ホットラインまでご連絡ください。



現在の派遣国数

78カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2019年5月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	40	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	30	
ガーナ	51	2
ガボン	18	9
カメルーン	22	1
ケニア	42	6
ザンビア	75	12
ジブチ	11	
ジンバブエ	5	
スーダン	20	
セネガル	42	3
タンザニア	59	3
ナミビア	13	
ブルキナファソ	17	
ベナン	47	
ボツワナ	12	
マダガスカル	34	
マラウイ	56	
南アフリカ共和国	5	6
モザンビーク	37	3
ルワンダ	41	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	13	
インドネシア	12	2
ウズベキスタン	24	7
カンボジア	26	10
キルギス	26	
スリランカ	38	1
タイ	33	5
タジキスタン		3
中華人民共和国	10	
ネパール	50	4
東ティモール	31	
フィリピン	28	2
ブータン	18	6
ベトナム	39	16
マレーシア	19	7
ミャンマー	9	4
モルディブ	13	
モンゴル	38	
ラオス	38	3

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	7	
サモア	22	1
ソロモン	32	5
トンガ	14	2
バヌアツ	20	4
バブアニューギニア	30	5
パラオ	10	5
フィジー	24	3
マーシャル	8	1
ミクロネシア	7	9

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	1	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
エジプト	14	3
モロッコ	21	6
ヨルダン	28	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		18	6	8
ウルグアイ		7		
エクアドル	51	5		
エルサルバドル	8			
キューバ		1		
グアテマラ	27	3		
コスタリカ	23	10		
コロンビア	15	14		
ジャマイカ	22	12		
セントビンセント	4			
セントルシア	8			
チリ	6	4		
ドミニカ共和国	37	7	4	1
ニカラグア	1			
パナマ	14	1		
パラグアイ	40	2	8	3
ブラジル			69	20
ペルー	15			
ペルー	44	5		
ボリビア	41	2	2	
ホンジュラス	27			
メキシコ	2	9		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,770 (770/1,000)	265 (188/77)	89 (29/60)	32 (11/21)	2,156 (998/1,158)
累計 (男性/女性)	44,913 (23,919/20,994)	6,496 (5,255/1,241)	1,476 (563/913)	542 (252/290)	53,427 (29,989/23,438)

JV = 青年海外協力隊
 SV = シニア海外ボランティア
 日系JV = 日系社会青年ボランティア
 日系SV = 日系社会シニア・ボランティア (単位: 人)

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	6、8
病虫害対策	24
自動車整備	18
経営管理	4
マーケティング	1
観光（観光業）	10、28
環境教育	36
日本語教育	4
体育	20
小学校教育・小学校教諭	14、26
生態調査	22
医療機器	25
高齢者介護	16

国別索引	掲載ページ
エクアドル	14
エジプト	4
ガーナ	8
ザンビア	4
スリランカ	16
ソロモン	36
タンザニア	20
パラオ	22
パラグアイ	26
東ティモール	10
ブータン	25
ベトナム	1、24
ホンジュラス	18
マラウイ	6

出身都道府県別索引	掲載ページ
福島県	6
埼玉県	14
東京都	18、24
長野県	8、26
静岡県	36
愛知県	10
滋賀県	22
福岡県	20
長崎県	16
大分県	25

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2018年度4次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊（「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニアボランティア」）の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY

レイアウト：S+M DESIGN FACTORY

印刷・製本：弘報印刷（株）

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶ KAIZEN全国大会に参加し、カイゼン活動の成果を発表（ザンビア）
- ▶ アスワン大学にて日本文化を紹介するイベント「Japan Day」を開催（エジプト）

特集1

商業・観光分野の活動ポイント

6

CASE 1 「食品」の製造・販売

渡邊あすみさん（マラウイ・コミュニティ開発・2016年度3次隊）

8

CASE 2 「石鹸」の製造・販売

高橋将太さん（ガーナ・コミュニティ開発・2017年度4次隊）

10

CASE 3 「ホテル業」の人材育成

星 雅之さん（東ティモール・観光・2016年度2次隊）

12

活動Q&A集

特集2

「定着可能な技術」を見極める

14

CASE 1 学習指導案の作成

佐藤大輔さん（SV/エクアドル・小学校教育・2016年度3次隊）

16

CASE 2 介護予防の体操

戸崎千尋さん（スリランカ・高齢者介護・2016年度3次隊）

18

CASE 3 自動車整備工場の運営

福地隆光さん（ホンジュラス・自動車整備・2016年度3次隊）

20

CASE 4 運動会の開催

井崎 奨さん（タンザニア・体育・2016年度3次隊）

22

“失敗”から学ぶ

堀井大輔さん（パラオ・生態調査・2016年度3次隊）

24

希少職種図鑑

▶ 病虫害対策 山川 玲さん（ベトナム・2015年度1次隊）

▶ 医療機器 小翠香織さん（ブータン・2016年度2次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

県庁職員 吉田太郎さん（パラグアイ・小学校教諭・2010年度1次隊）

28

OB・OG匿名座談会

観光分野篇

30

JICA海外協力隊のプチテクガイド

好きな布でエコバッグをつくろう！／太陽光の利用法／あるもので思い出の味

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「最新技術」

35

JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介



学校のスタッフと生徒全員による実習棟のペインティング

参加の流れ	
〈10カ月前〉 「Big Cleaning Day」の活動スタート	学校のスタッフ、生徒全員による、月1回3時間の5S活動。学校の改善活動の実質的スタート。
〈5カ月前〉 ファイリング棚手づくり活動	ファイリング棚を手づくりし、オフィスに設置。狭いオフィスに有効スペースの効果。
〈2カ月前〉 実習棟ペインティング活動	20年ぶりの実習棟のペンキ塗り替え。チームワーク、帰属意識の向上に効果。
〈1カ月前〉 KAIZEN全国大会参加発表	スタッフ3人で発表の役割分担。スタッフ、生徒全員で全国大会に参加を決定。
〈当日〉 大会参加	KAIZEN全国大会に参加。
〈1カ月後〉 発表内容の反省・次期テーマ模索	他社事例を参考に学校の発表内容を精査。次期大会発表に意欲。

Zambia

KAIZEN全国大会に参加し、カイゼン活動の成果を発表

文 = 澤村啓之さん (SV/ザンビア・経営管理・2017年度4次隊)

「KAIZEN」はザンビアで当たり前に通じる言葉です。「少しでもより良く」という意味で使っています。

私はザンビアの国立職業訓練校で経営管理の仕事をしています。学校の経営改善のための助言が主な仕事ですが、具体的な項目が決まっているわけではありません。スタッフのチームワーク向上のため、全員を巻き込んだ活動をしたと考えていたところ、タイミングよくザンビア政府から「Clean & Green Zambia」のスローガンが出されました。みんなできれいな国づくりをしようという運動です。これは渡りに船と、学校のスタッフ、生徒全員で学校の環境改善活動に取り組むことにしました。

月1回の「Big Cleaning Day」と名付けた大清掃活動、スタッフ手づくりのファイリング棚設置によるオフィス環境改善、生徒も巻き込んだ実習棟のペインティング活動……当初は思うように進まず、5Sや改善に関する勉強会を何度も開催し、手探りで活動を前に進めてきました。

この頃からです、皆の目の色が違ってき



KAIZEN全国大会発表。KAIZEN活動の政府機関であるKaizen Institute of Zambiaの勤めもあり、同大会に参加した

たのは、ファイリング棚設置で無駄な書類がなくなりオフィスを広く使えるようになった、ペインティングで実習棟がきれいになっただけでなく、不要パーツの仕分けができたなど、目に見える効果が次々と現れてきました。効果が見えてきたら、次にそれを発表したくなるのが人間の心理です。KAIZEN活動に関する政府機関の動機もあり、KAIZEN全国大会で活動の成果を発表することにしました。

しかし、ここからが大変でした。活動の効果は出ましたが、それをどのように測定したらよいかわかりません。発表も初めてでどんなストーリーで発表したらよいかもわかりません。発表原稿を何度も書き直し、発表前3日間は全員で何度もリハールを繰り返しました。

初めての大会発表。入賞こそ逃しましたが、学校の生徒も勉強の一環として大会に参加させ、スタッフを含めて貴重な体験をしました。大会翌日、スタッフが顔を見合わせて「来年はどんな活動成果を発表しようか」とほほ笑む姿が印象的でした。

「KAIZEN」、この言葉には「活動は継続して」という意味も含まれています。私の任期も折り返し地点。継続という観点からもこれからの活動が大事になってくると考えています。学校の環境改善の種はまだまだ一杯あります。スタッフ自らがKAIZENの種探しをして、活動の工夫を凝らす。そして、みんなで汗を流して、来年の大会では入賞する。これが今後の目標であり、私の活動の総仕上げです。

開催の流れ	
〈6カ月前〉 企画・情報収集	過去のJapan Dayの記録から今回の期間・日程を決め、学生たちとの会議スタート。
〈2カ月前〉 練習・準備開始	場所確保、活動ごとに練習スタート。学校との交渉開始。
〈1カ月前〉 内容決定・外部に伝達	プログラム作成、招待状送付、ゲストの送迎手配、ほかの隊員への参加依頼。
〈1カ月前〉 リハーサル	実際のステージを使って、グループや日程ごとにリハーサル。
〈当日〉 開催	1日目はステージで、2日目は体験ブースに分けて開催。
〈1カ月後〉 テレビ出演	エジプトのテレビの生放送で太鼓チームが演奏!
〈1カ月半後〉 お礼	お世話になった方々へ学生からの手紙配布、ダイジェスト動画発信。

Egypt



ソーラン節を踊った日本語学科の学生とエジプト隊員たち

アスワン大学にて日本文化を紹介するイベント「Japan Day」を開催

文 = 曾我佳花さん (エジプト・日本語教育・2018年度3次隊)

4月7、8日に、エジプトの南のアスワンにあるアスワン大学で「Japan Day」を開催しました。4回目の開催となる今回、過去の隊員たちが残した資料や過去のJapan Dayを知る学生たちの話を参考に、今年は2日間の日程で行うことになりました。

Japan Dayの準備が始まったのは去年の10月、私が赴任する4カ月前です。同配属先の先輩隊員が「今年は隊員が指揮を執らずに、学生主体でJapan Dayをやってみよう!」と提案。学生たちと会議をしながら、彼らのやりたいことを引き出し、各活動にリーダーを決め、彼らが責任を持って準備を進められるようサポートをしていました。

私がアスワンに派遣されたのは、今年2月。初参加の私よりも学生たちの方が経験者が多いという不思議な感覚の中、私も準備に参加しました。私が主に担当したのはプログラムや当日使用する発表資料(スライド)の作成支援です。これらの準備にも、過去の隊員たちが残した資料がとても



Japan Day終了後、学生と隊員たちが円陣を組む様子

役に立ちました。

過去の隊員だけでなく、現役のエジプト隊員たちもJapan Dayを盛り上げるに遠いアスワンまで来てくれました。学生たちと一緒にステージでソーラン節を披露してくれたり、裏方のお手伝いをしてくれたり、写真や動画の撮影をしてくれたりなど多くのことを手伝ってくれました。私と先輩隊員2人だけではできなかったところをたくさんフォローしていただき、隊員同士の協力の大切さを感じました。

1日目はステージを使い、太鼓や歌、ソーラン節などのパフォーマンスを披露。2日目は校舎の1階に体験ブースをつくり、お寿司や折り紙、書道など日本文化を紹介しました。1日目、2日目どちらにもそれぞれのよさがあり、見学にいらした来賓の方や、他学科の学生たちからも「今までで一番じゃないかな?というくらいすごかった!」たくさん準備がんばったね!」などという言葉をもらい、とても好評で頑張った学生たちも誇らしげでした。

外部からの反応はもちろんですが、一番よかったと感じたことは学生たちの変化です。Japan Dayは全員参加ということではなく、参加したい学生たちが集まって行っています。当日見学にきた学生から「来年は自分も参加したい」というような声がいくつもあがり、とても嬉しかったです。学生の意識が変わったことで、これからのJapan Day、アスワン大学日本語学科もさらによくなっていくことを期待しています。

※Japan Dayの詳細はアスワン大学日本語学科のFacebookページに記事として掲載しています。右記URLからぜひご覧ください。▶ <https://www.facebook.com/AUJLCS/>

商業・観光分野の活動ポイント

「商業・観光分野」の活動に共通する課題は、「つくれる商品・サービスを売る」という「生産者目線」から、「売れる商品・サービスをつくる」という「消費者目線」へと、活動対象者の意識を変えていくこと。この課題にどう対処するべきかを中心に、活動ポイントについて事例をもとに探っていく。

CASE 1 「食品」 の製造・販売

ビジネススキルの指導から 収入向上支援をスタート

▼ わたなべ 渡邊あすみさん(マラウイ・コミュニティ開発・2016年度3次隊)の事例
農村部の小規模ビジネスグループを対象に、収入向上の支援を行った渡邊さん。最初に取り組んだのは、基本的なビジネススキルの定着を図ることだった。

渡邊さんが配属されたのは、地域開発を担う県庁のコミュニティ開発事務所。県の農村部では住民が10〜50人ほどでグループをつくり、モリンガパウダーやヤシの葉細工などを製造・販売する小規模ビジネスに取り組んでいた。そうしたグループを巡回し、収入向上に向けた支援を行うことが、渡邊さんに求められていた活動だった。

「どんぶり勘定」からの脱却

渡邊さんの主な活動対象となったのは10グループ。着任するとまず、同僚とともにそれらを回って現状を調査した。すると、どのグループも基本的なビジネススキルに問題があることがわかった。そのひとつが、「利益」の観念の欠如だ。「材料費」を計算することなく、「ほかの人たちが付けているのと同じ金額」に価格を設定していたのだ。なかには、ほかと比べて明らかに大きいパンを同じ金額で売っているグループもあった。そのメンバーに原料とその購入費を確認し、試しにパン1個あたりの材料費を計算してみると、彼らが付けていた価格

をオーバー。グループのメンバーはそうした可能性をまったく予想していなかった。うで、「どおりでお金が増えていかないわけだ」とつぶやくのだった。

基本的なビジネススキルに関するもうひとつの大きな問題は、「帳簿記帳」の習慣がなかったことだ。そのため、月の売り上げがいくらなのかを尋ねると、メンバーたちがそれぞれ違う金額を口にするのだった。帳簿がなければビジネスの管理は不可能であり、たとえ適切な価格設定ができるようになっても、収入の向上は見込めない。そうして渡邊さんは、各グループに基本的なビジネススキルを教えることを最初の活動に設定。同僚とともに各グループを週に1、2回程度のペースで回り、材料費の計算手順を含む適切な価格設定の方法、および帳簿記帳の方法に関するトレーニングを、3、4カ月にわたって実施していった。

各グループのメンバーたちは、始めこそ学んでいることの意義が理解できない様子だった。また、材料費の計算には「割り算」など彼らが不得意とする作業もあった。しかし、適切な価格設定により収入が目に見えて向上するようになると、メンバーたちは渡邊さんに感謝の言葉をかけてくれるようになったのだ。

③ 新商品の開発

利益率がより高くなるよう、モリンガパウダーをさらに加工する新商品の開発も試みた。モリンガパウダーを原料に加えたクッキーやケーキ、パンなどだ。

以上のような商品の改良・開発が終わると、販路拡大に取り掛かる。狙いを定めたのは、県内の町中にある博物館だ。訪問者リストを確認させてもらうと、案の定、外国人観光客や他地域から来たマラウイ人観光客が多く、委託販売も快く引き受けてもらうことができた。

売れ行きの変化は期待以上だった。モリンガパウダーは、1カ月に売れる量が以前の約7倍に急増。さらにクッキーなどの新商品は、販売開始直後に売れ切れとなり、予約が入るほどの人気となった。

同じ博物館では、渡邊さんが支援したほかのグループの商品も委託販売してもらうことができた。そのひとつは、ヤシの葉で編む雑貨だ。そのグループも従来、実用品のゴザをつくって地元の住民だけに販売していたが、渡邊さんは土産物として外国人観光客に買ってもらえるような「コースター」や「鍋敷き」を新商品として開発。やはり博物館では良い売れ行きだった。

以上のような販路の拡大は、メンバーたちの自信にもつながった。農村部で暮らす彼らにとつて言わば「遠い存在」だった「博物館」や「外国人」と、ビジネスを通じてつながりを持つようになったからだ。今後はその自信を糧に、彼らが自力でビジネスのさらなる改善を進めてほしいと渡邊さんは期待している。



渡邊あすみさん

PROFILE

1990年生まれ、福島県出身。2012年、国際基督教大学を卒業後、化学系専門商社に就職。17年1月、協力隊員としてマラウイに赴任。19年1月に帰国。9月から海外の大学院に留学する予定。

活動概要

カロンガ県コミュニティ開発事務所に配属され、農村部の小規模ビジネスグループを対象に主に以下の活動に従事。

- 基本的なビジネススキル(価格設定、帳簿記帳など)のトレーニングの実施
- パンやクッキー、バイオブリケットなどの製造方法を教えるワークショップの実施
- 商品の改良や開発、販路開拓の支援
- 生活改善指導

* バイオブリケット…石炭粉におがくずなどの植物性廃棄物を混ぜ、高压で成形した燃料。「燃焼時間が長い」などの特長がある。



* バイオブリケットのグループ

新たな高材を探していたグループに「バイオブリケット」を紹介。地元では知られていない品物だったが、販売し始めると売れ筋商品になった

支援した ビジネス グループ



パン・クッキーのグループ

渡邊さんの活動のうわさを聞きつけ、「新たにビジネスを始めたい」と支援を依頼してきたグループには、パンやクッキーのつくり方を指導した



ヤシの葉細工のグループ

従来、実用品の「ゴザ」をつくり(左写真)、地元の住民に販売していたが、コースター(右写真)を開発して外国人観光客に売られるようになった



モリンガのグループ

新商品の「モリンガクッキー」のつくり方をグループのメンバーに指導する渡邊さん(手前右)。クッキーのほかにケーキやパンも開発した



モリンガパウダーは従来、バケツに入れて地元の住民に売り歩いていた



AFTER

開発したモリンガパウダーのパッケージ。「90の栄養素を含み、300の病を予防する」と効能を明記したラベルを貼った



AFTER

モリンガパウダーを原料に加えたクッキー。新たに開発したモリンガパウダーの加工品のひとつだ

CASE 2 「石鹸」 の製造・販売

新商品の「ココナツ石鹸」を開発し、 女性たちの収入向上を支援

▼高橋将太さん（ガーナ・コミュニティ開発・2017年度4次隊）の事例
 たかはししょうた
 貧困地域の女性たちの収入向上支援に取り組んだ高橋さん。利が薄い商品だった「ココナツオイル」に
 替え、「ココナツ石鹸」の製造・販売を始めたところ、首都でも売れる商品となった。

高橋さんが配属されたのは、郡庁所在地の町にある「ビジネス支援センター」。貧困地域の住民を対象に小規模ビジネスの支援を行う組織である。高橋さんの活動場所となったのは、町の中心部から2キロほど離れた地域だ。70人ほどからなるコミュニティがあり、大半が農業を営んでいた。特にココヤシの栽培が盛んで、十数人の女性があぐらにココナツオイルを製造し、町中で週2回開かれる市場に卸していた。高橋さんが取り組んだのは、そうした女性たちの収入向上を支援することだった。

コミュニティの住民たちは当初、初めて見る外国人の高橋さんを警戒する様子を見た。そこで、まずは関係構築に専念。毎日彼らのもとを訪ねては、一緒に食事をするなどした。そうして1カ月ほど経ち、彼らの警戒心が解かれたと感じた高橋さんは、ココナツオイルに関して生産者と消費者の両方を対象に調査を実施した。

【生産者側の調査】ココナツオイルの製造・販売に取り組む女性たちの作業現場を見学したり、彼女たちへココナツオイル製造に関する聞き取り調査を行ったりした。

高橋さんは、ココナツオイルを製造している女性たちと町の市場に足を運んで、ヒントを探った。注目したのは「石鹸」だ。石鹸は油脂を原料とするが、ココナツオイルを主原料に使ったもの（ココナツ石鹸）は売られていなかった。しかも、石鹸は高価な設備がなくても製造でき、その技術も易しい。

そうして、新たなビジネスとして「ココナツ石鹸」の製造・販売を女性たちに提案したのは、着任して5カ月ほど経った時期だ。ところが、売れる確証のない新商品に手を出すことに、女性たちは難色を示す。唯一、挑戦を希望してくれたのは、彼女たちのなかで最年少だった18歳の女性（以下、Aさん）だ。高橋さんは、彼女がいざ女性たちのリーダー役になってくれることを期待して、二人三脚で商品開発に取り組みむことにした。

工夫したのは「色」。黄色のココナツオイルだけでなく、赤色のパームオイルも原料に加えることで、鮮やかなオレンジ色の石鹸に仕立てることができた。また、市場で売られている他の石鹸との差別化を図るため、「包装」も開発。「オレンジ色」の魅力が伝わるよう、透明の袋を選択し、1つずつ個包装することにした。

商品開発を完了すると、早速市場での販売を開始。すると、「悩みだった手荒れが治った」「ニキビが良くなった」などと効能が好評に。そうして、口コミにより売り上げが伸びていったことから、高橋さんは販路の拡大を画策。狙ったのは、町から車で4時間ほどの距離にある首都だ。小手調べにイベント会場で販売したところ、完売。その際に外国人にも評判が良かったことが

得られたのは次のような情報だ。

●製造工程のすべてを手作業で行っているため、手間がかかり、生産性が低い。

●ココナツオイルは市場の卸先の言い値価格でしか販売できないため、「割に合わない」ビジネスになってしまっている。

●商品に虫などの異物が混入している場合があるなど、衛生面や品質に問題がある。

【消費者側の調査】 町中の市場で買物をしてきた地域住民約120人に、ココナツオイルの使用状況に関する聞き取りを行った。得られたのは次のような情報だ。

●使用される食用油はパームオイルが主流。「ココナツオイルを使っている」と答えた人は5パーセント程度に過ぎなかった。

割りの良い新商品を求めて

当初はココナツオイルの品質や生産性の改善が活動の中心になると予想していた高橋さんだったが、調査の結果を踏まえて軌道を修正。ココナツオイルが割の良いビジネスにつながるよう、これを使った新たな加工品の開発に挑戦することにした。

ら、高橋さんはAさんとともに首都の土産物店を回り、売り込みを重ねた。結果、新たな卸先の獲得に成功したのだった。

「コンテスト」で意欲を刺激

「首都でも買ってもらえる」という点は、Aさん以外の女性たちの意欲を刺激した。「自分も石鹸づくりに挑戦したい。つくり方を教えてほしい」という要望が彼女たちから上がったのだ。高橋さんはすぐさま、彼女たちを相手に石鹸づくりの講習会を開催。着任して10カ月、帰国する2カ月ほど前のことだった。

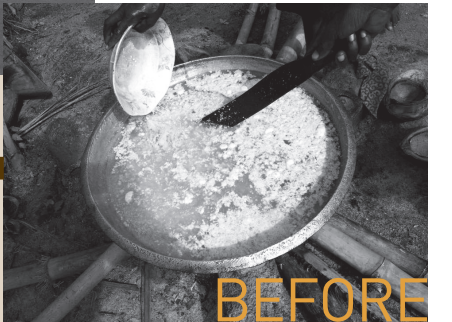
技術面で女性たちの多くがつまづいたのは、「包装」だ。「きれいに包装された商品」に接する機会がそれまでほとんどなかったことから、「きれいで均一な包装」がなかなか定着しなかった。その解決策として高橋さんが企画したのは、「包装コンテスト」。「競争」が刺激となって、技術レベルの向上につながると考えた。審査員役となったのは、高橋さんと配属先の同僚たち。女性たちの作業を見て、「丁寧さ」や「きれいさ」など数項目にそれぞれ5点満点で点数をつけ、総合得点で順位を決めた。このコンテストにより、女性たちの意識は向上。「きれいで均一な包装」が実現するようになったのだった。

そうして、女性たちがすべての工程について一定レベルの作業ができるようになってきたところで、高橋さんの1年間の任期は終了。以後、Aさんがリーダー役となって、さらに新たな商品を開発したり、販路を広げたりといった活動を展開していくことが、高橋さんの期待だ。

AFTER



▶首都の土産物店に陳列されたココナツ石鹸。生産者や商品を紹介するPOP広告を添えてもらった。商品名の「Natural Gifts」は高橋さんが提案し、Aさんの賛同を得て決定されたもの。天然素材にこだわっている点を表現しつつ、Aさんの名前にも因んでいる



▲水分を分離させてココナツオイルを抽出している様子。活動対象の女性たちは従来、オイルをもっぱら未加工のまま販売していた

◀ココナツ石鹸づくりに取り組む女性たちと、配属先の同僚たち。グループのオリジナルTシャツも作成した



▲高橋さん（左）が開催した石鹸づくりの講習会。混ぜ合わせた材料を木枠に流し込んでいる。木枠は大工に特注したものを使用。材料はココナツオイル、パームオイル、水、苛性ソーダ、香料。赤いパームオイルと黄色いココナツオイルを入れることで、鮮やかなオレンジ色に仕上がる



▼石鹸の「包装コンテスト」で実技に取り組む女性たち



高橋将太さん

PROFILE

1990年生まれ、長野県出身。東北大学大学院修士課程を修了後、江崎グリコ株式会社に研究職で入社。18年3月、協力隊員としてガーナに赴任（民間連携ボランティア制度）。19年3月に帰国し、復職。現在はコーポレートコミュニケーション部にて、CSRの推進を担当している。

活動概要

- セントラル州アゴナ・スウェドルにある「ビジネス支援センター」に配属され、貧困地域の女性たちの収入向上を目的に、主に以下の活動に従事。
- ココナツオイルに関する調査
- ココナツ石鹸のつくり方を教える講習会の開催
- ココナツ石鹸の「包装コンテスト」の開催
- ココナツ石鹸の販路開拓支援

CASE 3 「ホテル業」 の人材育成

観光業の仕事で重要な 「ホスピタリティ」の指導に注力

▼星雅之さん(東ティモール・観光・2016年度2次隊)の事例
 職業訓練校のホテルコースで授業の改善を支援した星さん。国内のホテルやレストランを回ってその現状を把握したうえで注力したのは、「ホスピタリティ」の指導をより手厚くすることだった。

星さんが配属されたのは、首都デシリにある3年制の職業訓練校のホテルコース。「フロント業務」や「ハウスキーピング」など、ホテルで働く者が必要とする技術を教えるコースで、生徒数は1000人あまり、教員数は10人という規模だった。

教員たちは「ツーリズム」など関連する専門知識を大学で学んでいたが、ホテルでの実務を経験していなかった。そのため、星さんが着任するまでは、授業がどうしても「座学」に偏ってしまっていた。そんななかで星さんが配属先から要望されたのは、「実技指導」への支援を行うこと。実際には、「レストランサービス」と「フロント業務」の授業で実技の指導方法を改善することが、活動の柱となった。

「ホスピタリティ」に特化した授業

着任後、星さんは休暇を利用して国内のホテルやレストランを回り、観光の現場の実情を探っていった。そのなかで見えてきたのは、「国内最先端」とされる観光の現場でさえも、「ホスピタリティ」に欠けて

いる点だった。東ティモールの人々は「明るい」「陽気」と感じる人が多かったが、「接客」になると、途端に「挨拶」や「笑顔」がなくなり、「無愛想」に見えてしまうのだ。この「ホスピタリティ」については、配属先の授業でも指導が手薄だと感じるテーマだった。例えば、「テーブルセッティング」の技術を教える授業。同僚たちは「スプーンやフォークを並べる順序」までは教えるが、「真っ直ぐに並べたら、客が気持ち良く感じる」といった点まで踏み込んだ指導とはなっていないかった。

そうした状況を踏まえ、「ホスピタリティ」を真つ向からテーマに取り上げた授業を星さんが担当するようになったのは、任期も折り返し地点に差し掛かるころだった。まず、「客の立場に立ち、どのようにもてなされたら気持ち良いかを考える」という、「ホスピタリティ」の一般的な概念を生徒たちに説明。すると彼らは、そうした姿勢の重要さは理解するものの、ホテルでの仕事で具体的にどのような振る舞いが「ホスピタリティ」に当たるのかわからない様子だった。そこで星さんは、「ホスピタ

リティのある接客」をテーマにしたディスカッションを導入。例えば、「レストランの客が周囲を見回しているとしましよう。どのような理由でそうした行為をしていると考えられますか」と尋ねる。すると、生徒からは「トイレを探している」などの意見が挙がる。星さんはさらに、「では、店の者はそこでどのような対応をするのがベストだろうか?」と問いかけ、生徒たちに考え、意見を述べさせる。

そうしたディスカッションの後には、「ロールプレイング」も行った。「ゲスト役」となったのは星さん。欲していることや困っていることが読み取れるような「挙動」を演じ、生徒たちには「そこで接客する側がどのような対応をすべきか」を考え、演じてもらった。

インターンシップ先での高い評価

前述の「ホテル巡り」でわかったもうひとつの重要な事実は、国内の大半のホテルでは、フロント業務に「コンピュータシステム」が導入されていることだ。宿泊の予約や会計などをパソコンで管理し、例えば予約の受け付け時、客の人数や希望条件などを入力すると、ふさわしい部屋が自動的にピックアップできるようなシステムである。一方、配属先には国内のホテルのフロント業務で使われているソフトが用意され

ておらず、「フロント業務」の実技授業はもっぱら「アナログ」の面に終始。生徒が「受付担当者」と「客」の役に分かれ、教員が用意したわずかなかりの想定問答を読み上げるといったものだった。そうした状況への対策として、星さんは「想定問答」のアイデアを出してそのバリエーションを増やす一方、国内のホテルのフロント業務で導入されているコンピュータシステムを簡略化したエクセルファイルを作成し、任期の半ば過ぎに授業に導入。「客の人数や希望条件を入力すると、ふさわしい部屋が自動的にピックアップできる」という機能を備えたファイルだ。星さんは、生徒たちが実習授業でその操作を体験することで、単にパソコン操作に慣れるだけでなく、「客の希望に応える」という「ホスピタリティ」の姿勢を生徒自身の血肉としてもらおうと考えたのだ。

以上のように、「ホスピタリティ」の本質とその具体的な実践方法を伝える授業への改革に力を注いだ星さん。するといつしか、生徒たちの間で「ホスピタリティ」という言葉が星さんのアイデンティティを表現するものと認識されるようになる。星さんがいつもよりも元気がなく、口数が少ない日には、生徒から「先生、今日は「ホスピタリティ」がありませんね!」などと声をかけられることも出てきたのだ。

星さんの活動の意義は、客観的にも表れていた。「ホスピタリティ」の指導を受けた生徒たちが、インターンシップ先のホテルに就職する数が例年より増加したのだ。「客の立場に立って考えられる」という、ホテル側が求める人材像にマッチしている点が評価されたことだった。



AFTER

▼「レストランサービスの」授業でナプキンの折り方を指導する星さんと生徒たち



BEFORE

▲右写真は、星さんが実習授業のために作成したフロント業務用のエクセルファイル。「静かな部屋が良い」という客の希望を入力すると、「エレベーターの昇降口から離れた部屋」が自動的にピックアップされるようなものになっている。左写真は、その操作を学ぶ生徒



▲同僚と星さんが生徒たちを引率し、首都にある高級ホテルを見学したツアー。星さんが休暇を利用して行ったホテルの調査は、見学ツアーやインターンシップの受け入れ先の開拓にもつながった



星雅之さん
PROFILE
 1979年生まれ、愛知県出身。ホテルで宿泊部門の現場業務や宴会・婚礼部門の営業業務に従事した後、2016年10月、協隊員として東ティモールに赴任。18年10月に帰国。現在は、地域活性化を手がける会社の社員として、観光コンテンツや新たな事業の開発、社会課題解決の事業などを担当する。

活動概要
 首都デシリにある職業訓練校「観光ホスピタリティ学校」のホテルコースに配属され、主に以下の活動に従事。
 ●授業の改善支援
 ●「ホスピタリティ」について教える授業の立ち上げ・実践
 ●校内ゴミ捨て場の設置(「ハウスキーピング」の授業の一環)
 ●インターン先ホテルの選定やインターン中の生徒のフォロー

活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。



回答者
たかまつまさと
高松正人さん

- JICA海外協力隊技術専門委員(担当分野:観光)
- 株式会社JTB総合研究所 上席研究理事
- 国連世界観光機関(UNWTO) ツーリズム・バロメーター・パネル
- 国連防災機関(UNDRR) ARISE理事、日本代表
- 東洋大学国際観光学部 客員教授
- 東京大学大学院情報学環 客員教授

Q1

日本人観光客の誘致に悩んでいます

日本人観光客の誘致を期待されている観光隊員より

私の配属先は、日本からもっと多くの観光客に来てもらえるようにすることを期待して、隊員の派遣を要請しました。ところが実際に現地に行ってみると、国内の観光客がほとんどで、とさおり欧米やオーストラリアからの旅行者を見かけることはあっても、日本人観光客の姿はめったにありません。そもそも成田から飛行機を3回乗り継いで24時間以上かかるこの国に、日本人観光客を誘致することはかなりハードルが高く、それを目的とする活動に疑問を感じています。

今後、どう活動したらよいのか、また配属先にもどのように話をしたらよいのか整理がつかず、悩んでいます。

Answer

観光分野の要請で、日本人観光客の誘致が主な活動のひとつになっているものは少なくありません。日本人は旅行先での消費額が多く、他国からの観光客と比べてマナーがよいと認識されているので、途上国だけでなく、世界の観光地が日本を観光誘致の重要なターゲットに位置付けています。配属先が隊員に日本人観光客の誘致にかかわる活動を期待するのは、ごく自然なことです。

一方、日本から遠く離れ、訪れる日本人も極めて少ない任地で、日本に向けて観光誘致活動したところで成果が出るのだろうか、と悩むのは無理もありません。まず、配属先やカウンターパートから、地域がめざす観光の姿(ビジョン)についてじっくり話を聴き、それを共有しましょう。観光振興の目的は「国内外の人々との交流、それとも「地域経済の活性化」でしょうか。では、観光で地域の経済が活性化したら、どんなよいことがあるのか。「収入が増える」「新たな雇用が生まれる」などが考えられます。

観光のマーケティングで重要なのは、有望なターゲット市場とセグメントを絞

り込んで、限られた労力やお金をそこに集中的に投下することです。観光誘致活動を日本に集中することが、本場に観光ビジョンの実現につながるでしょう。

か。任地の観光の魅力にもっと反応しやすい、誘致活動の効果の上がりやすい市場は他にないか、話し合ってみましょう。観光の市場は、遠い国ばかりではありません。より近く、手軽に来ることのできる国内主要都市や周辺国も手堅い有望な市場になります。直行便のある先進国も主要なターゲット市場でしょう。これらの市場に基盤を置くことが基本です。

では、日本人を誘致するのは諦めるべきなのでしょうか。いいえ、24時間以上かかる日本に住む日本人を誘致するのは難しいかもしれませんが、任国や近隣国にいる日本人は有望なターゲットになります。本当に魅力的な観光コンテンツがあれば、日帰りや泊で来てもらいましょう。彼らがその観光を楽しめば、その魅力をSNSや口コミで日本人の友人・知人に伝えてくれるでしょう。それが広まれば、いつの日か日本からも観光客が訪れる日が来るかもしれません。

Q2

市場調査の方法について教えてください

地方行政機関の観光部門で活動する観光隊員より

協力活動手法の講座で、「観光振興の活動をやるうえで、観光客の動向など現状を把握することが大切だ」と教えられました。任地では十分な観光統計が整備されておらず、ましてや観光客対象のアンケート調査なども実施されたことがないようです。

私の配属先である地方行政機関の観光部門のカウンターパート(以下、CP)に、観光客のニーズの最近の変化や新たな観光のトレンドなどについて尋ねてみても、よくわからないのか、はっきりした答えが返ってきません。このような状況で、任地の観光客の実態を把握するには、どのような方法があるのでしょうか？

Answer

行政機関の職員は、日常業務で忙しく、しかも観光客との接点にいるわけではないので、観光担当者であっても思いのほか観光の現状を具体的に把握できていないことがあります。あなたのCPもそのような状況なのだを推察します。

私は、旅行会社の企画・管理部門にいるときに、当時の上司から「迷ったら現場に行け」「答えは現場にある」と教えられ、北海道から九州まで旅行営業の現場に何度も足を運んで実態を聴きだし、それをもとに会社の戦略や制度を考えた経験があります。

あなたへの私のアドバイスも、「答えは現場にある」です。では、観光の「現場」はどこでしょうか。間違いなく、お客様が観光活動を楽しみ、移動し、宿泊する、観光事業者のところ。行政機関の執務室の中ではありません。

たしかに観光統計が整備されていないければ、年間何人観光客が来ているのか、どの月がピークなのか、どの国から来ているのか、だれと来ているのか、任地ではどのような観光行動をしているのか、どのくらいお金を使ってくれている

のかなど、観光振興の大切な要素が正確にはわかりません。

それでも観光の現場の人たちは、観光客の動向や嗜好をしっかり把握し、満足していただける観光サービスを日々提供しています。なぜならば、彼らは毎日観光客と直接対話し、時には苦情を言われ、怒られ、時には喜ばれたり褒められたりしながら、肌感覚で観光客を理解しているからです。

オフィスを外へ出て、答えを探しに「現場」に出ていきましょう。ホテルのフロントやコンシェルジュ、レストランスタッフ、地元の旅行会社スタッフ、ツアーガイド、観光バスの運転手などに直接話を聴いてみましょう。ざっと統計以上に役立つ「ナマ話」がいろいろ出てくるでしょう。それを独り占めするのはもったいないと思ったら、CPや同僚を誘って「現場」へ行きましょう。オフィスの外で仕事をすることが難しいなら、彼らを誘ってランチをしながら、もしくはお茶とおやつを楽しみながら座談会をするのもいいでしょう。そこからまた、現場の人とのつながりが広がりますよ。

*セグメント…顧客の属性(年齢・性別・所得層・旅行の嗜好など)。

「定着可能な技術」を見極める

日本では当たり前に使われている技術のなかには、伝える相手の知識や技術のレベル、あるいは職場環境などによって習得や実践が難しいものもある。本特集では、日本人が持つ技術を現地の人たちに合った形にアレンジしたうえで伝えた事例をピックアップ。「現地に合った技術」を見極めるヒントとしていただきたい。

CASE 1



学習指導案の作成

さとうだいすけ
佐藤大輔さんの事例
(SV/エクアドル・小学校教育・2016年度3次隊)

佐藤さん基礎情報

PROFILE

1974年生まれ、埼玉県出身。大学卒業後、電機メーカー勤務を経て、沖縄県と埼玉県で小学校教諭を務める。退職後、2017年1月にSVとしてエクアドルに赴任。19年1月に帰国。現在はNPO法人日本UAE青少年児童育成交流協会所属の教員として、アブダビ日本人学校に勤務。

活動概要

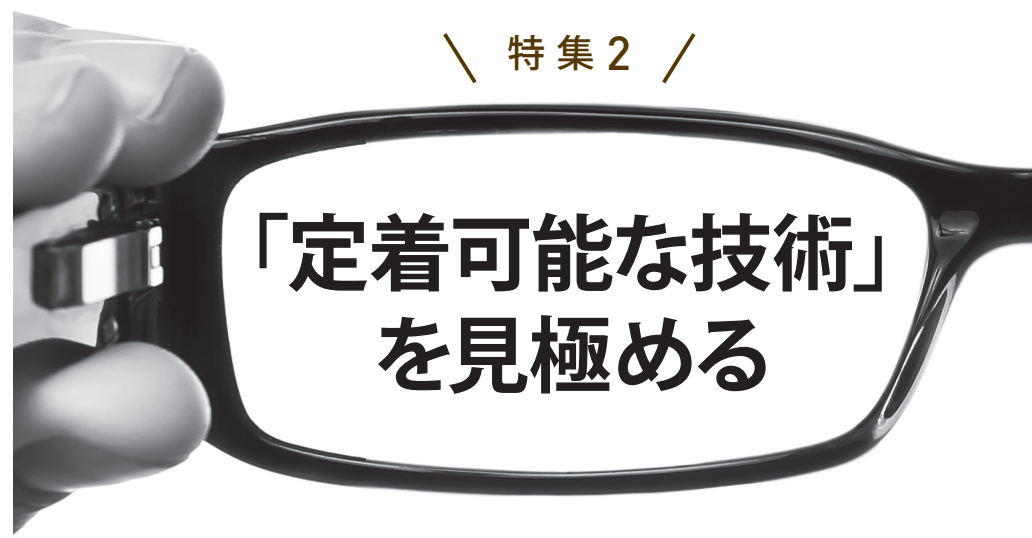
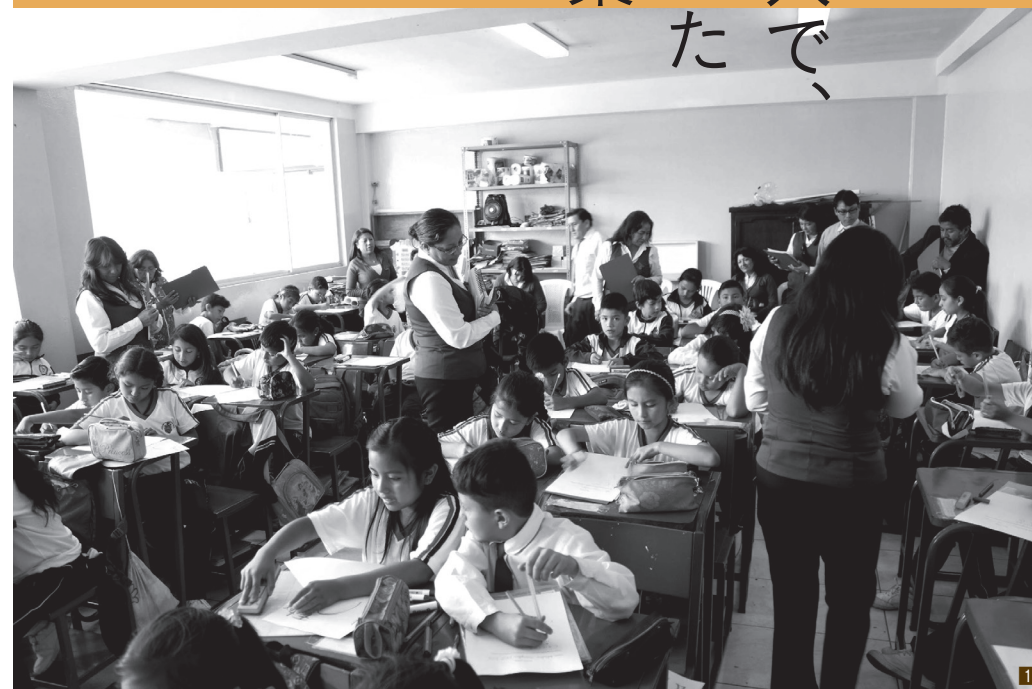
ピチンチャ県キト市の市役所教育局教育管理課に配属され、管轄する小学校を対象に算数教育に関する主に以下の活動に従事。

- 「校内研修」の導入・定着の支援
- 「年間指導計画」や「単元ごとのカリキュラム」の作成と、その導入・定着の支援
- 「算数ドリル」の作成と、その導入・定着の支援
- 導入した「年間指導計画」と「単元ごとのカリキュラム」に基づいた「章末テスト」の作成と、その導入・定着の支援

- 1 小学5年生の算数の研究授業。佐藤さんは参観する教員に「机の間を回って児童の反応を見たほうがいい」とアドバイス。研究協議で彼らから活発に意見が出るようになった
- 2 小学2年生の算数の研究授業。従来、「量感」を体験させる活動がなされていなかったことから、佐藤さんが新たに作成したカリキュラムではこれを導入。写真に写る「てんびん」は、教員たちが手づくりしたもの
- 3 他隊員と合同で開いたキト市の算数科教員を対象とする研修で、「比」の模擬授業を行う佐藤さん

校内研修の導入で、 現地教員に合った 「指導案」を提案

市の教育行政機関に配属された佐藤さん。研究授業を核とする「校内研修」の導入・定着を支援する活動では、不慣れな現地教員に合った「学習指導案」の作成方法を考え、提案した。



佐藤さんが配属されたのは、首都キト市の市役所教育局教育管理課。管轄する小中高一貫校9校を対象に、教育の質向上に向けた働きかけを行う機関だ。着任当時、配属先は小学校教員の算数指導力向上を図るため、「研究授業」や「研究協議」などを要素とする「校内研修」を定着させたいと考えていた。その実現に向けた支援を行うことが、佐藤さんに求められていたメインの役割。実際には、以下のようなプロセスでこの活動を進めていった。

- 1 9校は2学期制で、年度開始は9月。佐藤さんは2016年度の第2学期初頭に着任し、まずは各校を回って現地教員が行う算数授業を参観するなどして、現地教員たちの指導力の現状を確認。
- 2 16年度第2学期の終わりに、校内研修についての研修を各校の校長と副校長を対象に実施。
- 3 ②の後に、各校で校内研修を主導する教員（校内研修リーダー）を立ててもらい、彼らを対象に校内研修についての研修を実施。
- 4 校内研修リーダーが各所属校における校内研修の計画を策定。
- 5 算数授業を担当する各校の教員を対象に、佐藤さんが講師となって「学習指導案（後述）」の作成方法を伝える研修を実施。
- 6 17年度に入ると、順次各校で校内研修が開始。第1学期に実践し

たのは7校で、計10回の研究授業が行われた。

17年度第1学期に校内研修を實踐できなかった2校では、教員たちに佐藤さんが校内研修の目的や方法などを再度説明。

17年度第2学期には全9校で校内研修が実践されるようになる。佐藤さんの任期中に9校で行われた研究授業の回数は、計約100回にのぼった。

指導案作成の指導に注力

日本で研究授業が行われる際には、授業の計画をまとめた「学習指導案（以下、指導案）」を授業者（教壇に立つ教員）が事前に作成し、参観する教員たちに配布する。日本では一般に、「単元（共通の課題でくくられたひとまとまりの授業）」と「本時（その回の授業）」の両方について、主に以下のよう

- 【単元に関する項目】
- 単元の目標
- 児童観（児童の学力や教科に対する関心・意欲）
- 児童観（児童観を踏まえてとるべきだと考える指導方法）
- 単元計画（単元を構成する各学習活動の内容、単元における本時の位置付けなど）
- 【本時に関する項目】
- 授業の目標

授業計画（どのような順序でどのような学習活動をさせるか、児童にどのような発問をするか、児童の理解度をどのように評価していくかなど）

板書計画（どのタイミングでどのような板書をするか）

研究授業で指導案を作成・配布するのは、授業を分析・評価するうえでの資料としてもらうためだが、指導案の作成作業は、児童の考察を深めたりする機会にもなるため、授業者自身の指導力向上にもつながる。そうした意図で実施したのが、前述の⑤の研究だ。

佐藤さんは⑤の研修に先立ち、「研究授業を実施したことがある」という学校で試しにそれを実践してもらった。すると、授業者が作成した指導案には、「児童への発問」や「理解度の評価方法」などが記載されていたが、実際の授業は指導案と乖離。授業者は指導案を軽視し、記載していた「理解度の評価」などをせず、結果、児童の理解も進まないのだった。実際の授業をイメージしながらより良い指導法を考えて指導案を作成し、それを忠実に授業で実践する――。指導案に馴染みがない現地教員にこれを徹底してもらうためには、日本で一般的な作成方法をそのまま真似てもらうのではなく、彼らがやりやすい方法で作

成してもらったことが必要だと佐藤さんは考えた。そうして⑤の研修では、以下のように現地教員が苦手とする「理論」の要素を省き、一方で「実践」の質向上の効果が高い作成方法を提案した。

【簡略化】

■授業計画の理論的根拠にあたる「単元に関する項目」を省略。

【実用性の強化】

児童がどのような箇所でのようにつまずき、それに対して教員がどのような指導をするべきかを考えることこそ、授業の実践で大事だと判断にもとづき、以下のやり方を勧めた。

■教員の発問に対する児童の回答につき、できるだけ多く予想して記載する。

■授業計画では、すべての学習活動に評価方法を記載することはせず、もっとも重要な学習活動に限って記載。そうして評価の実行を容易にする一方、記載する評価方法については、「理解できた／理解できなかった」の2段階ではなく、「理解できた／おおむね理解できた／理解できなかった」の3段階の細かなものにする。

ステップアップの研修を実施

校内研修が各校で始まった当初から、研究授業の指導案の作成は授業者に任せ、佐藤さんは研究授業を参観し、その後の研究協議で

指導案の改善点を指摘するという形で指導を進めた。研究授業の質が目立って低い学校については、その学校の教員を対象にあらためて指導案作成の指導をしたり、佐藤さん自身がモデル授業をやってみせたりした。そうして現地教員たちが指導案の作成に慣れてきたと感じたのは、校内研修の開始から1年ほど経ったころだ。授業のディテールを想像した跡がうかがえる指導案が見られるようになり、それに伴って研究授業自体の質の向上が見られたのだ。

その時点で佐藤さんは、現地教員たちの指導案のレベル、引いては彼らの指導力のさらなる向上を目的に、あらためて指導案作成に関する研修を校内研修リーダーたちに対して実施。「児童への『発問』の仕方が、指導案作成の段階で十分に練られていない」など、研究授業の授業者に共通して見られ続けた課題を指摘する一方、徐々に「理論」への理解を深めてもらうことを狙って、以前の指導案の研修では触れなかった「単元計画」と、そこでの本時の位置付けを記載する」といったやり方を勧めた。そうして佐藤さんの任期終盤には、前回より格段に良い研究授業を行う教員や、日本の教員と遜色ない研究授業をする教員も見られるようになったのだ。



介護予防の体操

と き き ち ひろ
戸崎千尋さんの事例
(スリランカ・高齢者介護・2016年度3次隊)

戸崎さん基礎情報

PROFILE

1985年生まれ、長崎県出身。大学卒業後、介護福祉士として病院に勤務。2017年1月、協力隊員としてスリランカに赴任。19年1月に帰国。

活動概要

- マータラ県庁に置かれたスリランカ社会福祉省の高齢者対策事務局に配属され、主に以下の活動に従事。
- 老人会の例会や高齢者施設における、健康講話や介護予防・健康維持を目的としたアクティビティの実施
- 健康に関する啓発を目的とした新聞の発行

- 1 老人会の例会でスリランカの歌に合わせて行う体操を指導する戸崎さん
- 2 例会でつくった「新聞紙ゴミ箱」を手にする老人会のメンバーたち
- 3 戸崎さんが制作した「健康新聞」を手にする高齢者福祉担当官。18号発行し、マータラ県庁の各郡事務所に掲示されたほか、スリランカ社会福祉省が全国の老人会に配布するニュースレターにも写真が掲載された

特集2

「定着可能な技術」を見極める

老人会の例会で

現地の歌に合わせて行う 体操を紹介

老人会の例会を回り、アクティビティの紹介をした戸崎さん。活動の最大の課題は、紹介したアクティビティを自身の帰国後にも続けてもらえるようにすることだった。

戸崎さんが配属されたのは、スリランカ社会福祉省がマータラ県庁内に出生機関として設置する高齢者対策事務局。老人会の運営支援など、同県における高齢者福祉事業を担当する部署だ。高齢者と直接かかわる現場の業務を担うのは、県庁の各郡事務所には一人ずつ配置されている社会福祉省の高齢者福祉担当官。配属先には彼らを取りまとめる職員が一人おり、彼女が戸崎さんのカウンセラー（以下、CP）となった。

戸崎さんの活動の柱となったのは、県内各地にある老人会の活動を支援することだ。当時、県内に存在した老人会は約650。それらは次のような共通のスタイルで運営されていた。

運び、介護予防や健康維持につながる以下のようなアクティビティを紹介した。

■野菜ゲーム
「立つ」「手を上げる」などいくつかの動作に別々の野菜を割り振り、進行役が野菜の名前を発しては、それに対応した動作を行っていくゲーム。戸崎さんの自作だ。

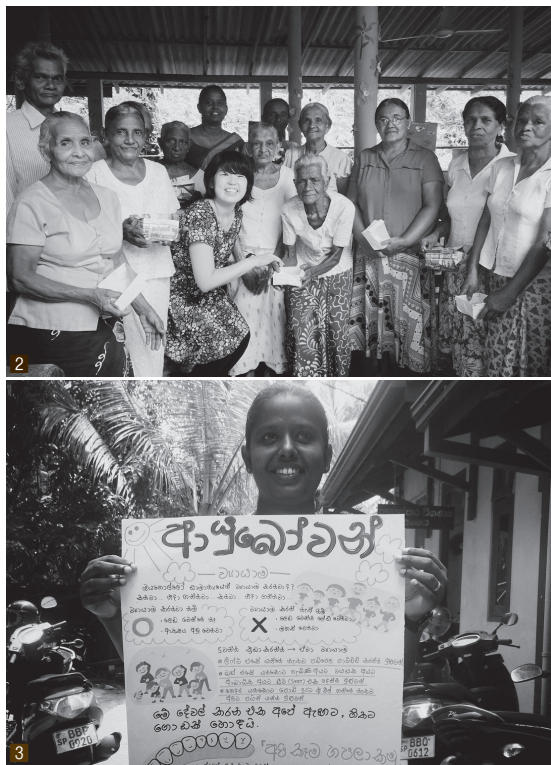
■嚙下体操
食べ物が入る「誤嚥」を予防するために行う体操。

■現地の歌に合わせて行う体操
「右腕と左腕で同時に異なる動きをする」など、脳の活性化が期待できるような体操。

■新聞紙を材料とする「ゴミ箱」の製作

同僚たちへの引き継ぎは断念

老人会を支援する活動について、戸崎さんが当初から最大の課題だと考えていたのは、紹介するアクティビティを自分が帰国した後にも継続してもらえるようにすることだった。例会には戸崎さんとともにCPや各郡の高齢者福祉担当官が参加することもあった。そこでまず、彼女たちにアクティビティの音頭がとれるようになってもらい、帰国後を託そうと画策。彼女たちが例会に参加する際は、老人会のメンバーを2グループに分け、一方のアクティビティの進



行役を彼女たちに担当してもらった。彼女たちには、各アクティビティがなぜ高齢者にとって良いのかも説明。すると、意義への理解を示し、楽しそうに取り組んでくれた。ところが、彼女たちが例会に参加する回数は次第に減っていく。老人会のメンバーに聞くと、戸崎さんが着任する以前は、例会に行政の人間が来ることは皆無だったと言う。そうして戸崎さんは、別の対策を考え始める。

次に計画したのは、紹介するアクティビティを動画に収め、各老人会に配布することだ。動画を参考にしながら、各老人会に自力で継続してもらおうと考えたのだった。動画に登場するモデルとして目星を付けたのは、県庁の各郡事務所配置されている「民生委員」のような立場の人（以下、「民生委員」）だ。仕事柄、高齢者にも

よく顔を知られている彼らが登場する動画であれば、高齢者たちも親しみを感じ、活用してくれるだろうと考えたのだった。このアイデアは「民生委員」たちも賛同。ところが、いざ撮影をするという段になると、彼らのドタキャンが続いてしまう。「協力隊員が現地での人の尻を叩いてつくった教材など、使われなくなってしまうに違いない」。そう考えた戸崎さんは、動画の制作も取りやめることにしたのだった。

アクティビティ自体の魅力

アクティビティ自体の魅力を高めれば、老人会のメンバーに自力で続けてもらえるはず——。動画づくりが停滞していた任期の半ば、戸崎さんはこう考えるようになっていった。そうして、紹介す

■リーダー役は3人。毎年一回、改選される。

■互助会としての機能も果たしており、会費はメンバーが他界した際の香典などに充てられる。

■例会を月に一回開催。開催日は

各老人会が独自に決定。時間は1〜2時間で、内容は「宗教のお祈り」「会費の支出に関する報告」「お茶を飲みながらの談話」など。

戸崎さんは任期中、約40の老人会の例会に1〜数回ずつ足を

るアクティビティに工夫を凝らすうとするなかで、ひとつの「ヒット」が生まれる。前述の「現地の歌に合わせて行う体操」だ。

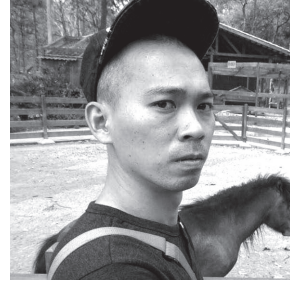
考案のきっかけは、「スリランカの歌を歌ってみてほしい」という、老人会のメンバーたちから多く寄せられたリクエスト。戸崎さんは試しに一曲覚えることにしたが、曲の選択では「子どもから高齢者まで、現地のあらゆる世代が知っているものにする」という条件を設けた。子どもでも知っている歌を戸崎さんが歌えば、老人会のメンバーが家で孫たちと会話する際のネタになると考えたからだ。戸崎さんは老人会の例会では

たもので、タイトルは『この国は私の国』。母国のすばらしさを讃える歌詞の歌であり、現在も若い世代の歌手にカバーされることもあるため、現地ではあらゆる世代が歌えるとのことだった。

戸崎さんはこの曲を選ぶと、ついでに「ラジオ体操」のようなものをつくらうと着想。高齢者たちがそらで歌えるような歌に付けた体操ならば、覚えるのが容易で、自力で続けてもらえるだろうと考えたのだった。そうして戸崎さんは、脳の活性化が期待できるようなさまざまな動きで構成する体操を創作。立ったままでも椅子に座った状態でもできるものにした。

そうして戸崎さんは、老人会のメンバーたちにこの条件を伝えたいと、覚える曲の推薦を依頼。すると、いくつか挙げてもらうことができた。スリランカの歌は日本人には難しいリズムを持つているのが特徴だが、推薦された曲のなかに1つだけ、テンポがゆったりとしており、日本人にも歌いやすいものがあった。1970年代から90年代にかけて活躍したスリランカの女性歌手が歌い、流行っ

つかった体操を老人会の例会で紹介し始めると、予想以上の反響があった。「家で孫と一緒にあの体操をやったよ」「あなたが来ない例会でもあの体操をやっている」といった報告を受けるようになったのだ。なかには、戸崎さんに電話を掛けてきて、「歌のこのフレーズの所では、どんなふう体を動かすのだったかな？」と尋ねてくるような人もいた。そうした反響は、ほかのアクティビティではなかったものだ。そうして戸崎さんは、「アクティビティ自体の魅力が高めれば、老人会のメンバーに自力で続けてもらえるはず」との考えが正しかったことを実感できたのだった。



自動車整備工場の運営

ふくち たかみつ
福地隆光さんの事例
(ホンジュラス・自動車整備・2016年度3次隊)

福地さん基礎情報

PROFILE

1986年生まれ、東京都出身。専門学校卒。輸入車販売店で四輪車と二輪車の整備に携わった後、テーマパークを運営する企業で人材育成業務に従事。2017年1月、協力隊員としてホンジュラスに赴任。19年1月に帰国。

活動概要

- ドロテオ・バレラ・メヒア技術中高校(ラ・パス県ラ・パス市)の自動車整備科に配属され、主に以下の活動に従事。
- 同僚教員を対象とした技術講習の実施
 - 同僚教員の授業の支援(実習授業の実施)
 - 5S活動の普及を含むモラル改善運動の実施
 - 自動車整備科が運営する整備工場の業務改善支援

- 1 配属校の自動車整備科の実習棟。ここが整備工場として使われた
- 2 外部から持ち込まれた車の整備を行う同僚教員たち
- 3 配属校の整備工場に導入された、工程管理のための作業予定表。配属校の状況に合わせ、「車庫ごと」の予定を記載するものとした

特集2

「定着可能な技術」を見極める

整備工場の業務を同僚に実践可能な改善方法で提案

技術者を養成する学校の自動車整備科に配属された福地さん。同僚たちへの念入りなヒアリングにより、彼らが実践可能な方法を探ったうえで、同科の整備工場の業務改善を促した。

福地さんが派遣されたのは、技術者の養成を目的とする公立学校。日本の中学一年生から高校3年生までにあたる6学年で構成され、最後の2学年で各科に分かれて専門技術を学ぶことになっていた。福地さんが配属された自動車整備科には当時、2学年合わせて約200人の生徒が在籍。「クラス担任制」がとられており、6人の教員がそれぞれクラスずつ受け持っていた。福地さんのカウンセラーパート(CP)となったのは、同科の主任教員だ。

活動の柱となったのは、同僚を対象にした自動車整備技術に関する講習の実施や、彼らが行う授業の支援。そのかわり、任期の終盤になると、同科が運営する整備

なる。また、卒業後に整備工場を構える可能性もある生徒たちに、工場運営の基本を知ってもらう場にもなる。福地さんはそう考え、整備工場の業務改善を支援することにしたのだった。

この活動を着想するきっかけとなったのは、任期の半ばごろから始めた「工場見学」だ。生徒たちが卒業後、整備士として働く際にかかるような知識や技術が必要なのかを見極めるため、休日を利用して国内の整備工場を訪ねては、運営の状況を教えてもらった。任期中に回った工場は100カ所にのぼる。

工場見学では、「整備技術」だけでなく、「運営」についても聞き取りを行った。印象的だったのは、いずれの工場でも「顧客管理」がシステムティックになされていることだった。日本の整備工場では、氏名や住所などの基本情報、所有する車の情報、整備履歴などを専用ソフトに入力し、管理する。一方、ホンジュラスの整備工場では、各整備士の「記憶」だけで顧客情報が管理されていた。

顧客管理がシステムティックになされていないという点は、配属校の整備工場も同じだった。配属校では、整備依頼で持ち込まれた車をいづれかの教員がひとり担当するシステムがとられていた。しかし、顧客の情報を記載する



2

3

Estado de reparaciones	
No. 1	Taxi
No. 2	
No. 3	
No. 4	
No. 5	
No. 6	Busito
No. 7	
No. 8	
No. 9	
No. 10	
No. 11	Mototaxi
No. 12	Mototaxi
No. 13	Mototaxi
No. 14	Mototaxi
No. 15	Mototaxi
No. 16	Mototaxi
No. 17	Mototaxi
No. 18	Mototaxi

「台帳」などはつくられておらず、担当者以外の教員はその車の持ち主について名前すら知らない。そのため、顧客から問い合わせがあっても、担当者が不在ならば何の対応もできない状態だった。

事前のヒアリングで取捨選択

そうして、配属校の整備工場の業務改善に取り組もうと考えた福地さんは、まず、同僚たちへのヒアリングを念入りに行った。彼らが「できそうなこと」と「できないこと」を見極め、それを踏まえた改善案にしなければ、定着は望めないと考えたからだ。福地さんは、日本の整備工場の一般的な業務フローを紹介したうえで、同僚たちに「できそうなこと」「ヒアリングを終えると、改善案

の叩き台を作成。それについてCPと議論を重ね、修正を加えていった。最終的に実施した改善の主な内容は次のとおりだ。

【サービスの基本的な流れ】

「顧客から車を持ち込まれたら、整備が必要な箇所についてその場で確認したうえで、整備内容を説明し、納得してもらう」など、顧客の信用を得るためのやりとりについては、日本の整備工場で行われているものをなぞってもらうことにした。

【作業工程の管理】

■各車に担当者を割り振るシステムを止め、授業で車を使いたい教員が随時、どの車を整備しても構わないというシステムに変更。

■日本の整備工場では、一日の作業計画表をつくって工程を管理するのが一般的。各整備士が何時にどの車のどのような作業をするか

を明示した表だ。一方、配属校の整備工場は各教員が一日中作業に張り付いているわけではないため、同じような表では空欄ばかりになり、機能しない。そこで、「各車庫で、何時にどの車のどのような作業をするかを明示した表」を工程管理のために導入した。

■日本の整備工場では、整備依頼の受け付けをした者が「作業指示書」を作成し、作業担当者に回す。「顧客の情報」「車の情報」「必要な作業」などを記載するもので、申し送りを確実にするための書類だ。これにつき、日本で一般的な書式は同僚たちから「複雑すぎる」との意見が多かったことから、「車の情報」の記載項目を「車種」と「色」だけに減らすなど、簡略化したうえで導入した。

同僚教員の大半は、整備士としての実務経験を持たない。それだけに、「元来、「整備技術」だけでなく、「工場経営」にも関心は強かった。さらに、事前に行った彼らへのヒアリングを踏まえた改善案だったこともあり、講習会では彼らから積極的に質問が投げかけられ、実施への意欲がうかがえた。

そうして、提案した改善が実施されるようになってまもなく、福地さんの任期は終了。その後も、オンラインストレージサービスを通じて福地さんのチェックとフォローを受けながら、実践は続けられているという。

* オンラインストレージサービス…インターネット上のサーバにファイルを置き、共有できるようにするサービス。



運動会の開催

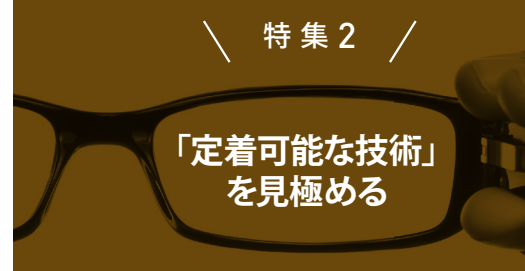
井崎 奨 さんの事例
(タンザニア・体育・2016年度3次隊)

井崎さん基礎情報

PROFILE
1992年生まれ、福岡県出身。大学のスポーツ学部を卒業した後、2017年1月、協力隊員としてタンザニアに赴任。19年1月に帰国。

- 活動概要
- 体育授業の実施
 - 各種運動会の開催(配属校におけるもの、配属校を含む4校合同のもの、地域住民によるもの)
 - スポーツ大会の実施(配属校を含む5校合同のもの)

- 1 体育授業でラグビーに取り組む生徒たち
- 2 体育授業でアルティメットに取り組む生徒たち
- 3 井崎さんの任期の2年目を実現した4校合同の運動会で、最終種目のリレーの直後に湧き返る参加者たち



生徒たちだけで開催し続けられるような運動会を模索

中等学校に配属され、体育教育の支援に取り組んだ井崎さん。配属校に体育教員がいなかった井崎さんの帰国後に生徒たちだけで開催し続けられるような運動会の形を模索した。

井崎さんが配属されたのは、日本の中学2年生から大学1年生にあたる6学年で構成される中等学校。生徒数は1学年約100人という規模だった。求められていた役割は、体育教育の質向上を支援することだ。

タンザニアの中等教育では、2、4、6年生の3回、進級や進学を左右する国家試験が行われる。体育は美術などとともに「選択科目」とされており、学校ごとに1つを選ぶこととなっているが、配属校は体育を選択していなかった。そのため、体育授業には重きが置かれておらず、担当教員も不在。カウンターパートとなったのは地理を専門とする教員であり、



学」が続出し、まとまりを欠いたものになってしまった。

そうして迎えた本番は、練習に出たことなかった生徒たちも参加し、イベントとしては盛り上がった。しかし、練習を進める過程で「協力し合うこと」や「自分の役割に責任を持つこと」などを学んでいくのが、運動会の主眼。井崎さんには、「やる気が空回りし、ひとりですっ走りまわった」との反省ばかりが残った。

生徒どうしで教え合う

井崎さんはまず、試みに体育授業を日本の「部活動」のように生徒たちだけで運営させてみた。題材はサッカー。授業の前半に練習をし、後半に試合をするという形式を井崎さんが決めたうえで、生徒たちに練習メニューやタイムスケジュールを考えてもらった。立

運動会を終え、任期が半ばに近づいても、体育を担当する教員が配置される気配はなかった。このままでは、自分が帰国した後に何も残らない。危機感を覚えた井崎さんは、せめて運動会だけでも、なんらかの形で開催され続けるようにする道を模索し始めた。

井崎さんはまず、試みに体育授業を日本の「部活動」のように生徒たちだけで運営させてみた。題材はサッカー。授業の前半に練習をし、後半に試合をするという形式を井崎さんが決めたうえで、生徒たちに練習メニューやタイムスケジュールを考えてもらった。立

当初から校長には「彼は体育の教員免許を持っていないので、体育授業の担当にはできない」と告げられていた。校長からはさらに、「高学年は国家試験の科目の勉強に力を入れなければならないと

てた計画は授業当日の朝までに提出させ、井崎さんが必要な修正を施す。実際の授業では、生徒どうしで技術を教え合ってもらった。そうした授業を何度か繰り返すと、生徒たちが練る授業計画のレベルが徐々に向上し、授業中の積極性やまとまりも増していくのだった。井崎さんは始めこそ、教え方などについて一般的な指導をしたが、以後はその必要もなくなっていた。

そうして「生徒に運営を任せる授業」が成立するとわかったことから、井崎さんは2回目の運動会を計画し、その練習を生徒たち自身で進めてもらうことにした。

2回目の運動会は、国家試験の負担が少ない1、4年生だけに参加を限定する一方、配属校と近隣校3校の合同開催にした。まず、配属校の1、2年生の体育授業で、生徒が自分たちで種目の練習を進める。すると期待どおり、彼らは前回よりも積極的に取り組んだ。彼らの練習がある程度進むと、今度は彼らが放課後、10人ほどのグループを組んで他の参加校に3、4回ずつ赴き、その生徒たちに種目の指導をした。この巡回指導は、教える側と教えられる側の両方にとって刺激が大きいようだった。配属校の生徒たちは互いに意見を出し合いながら指導を進めていき、「協力する力」が目に見えて向上。一方、彼らの積極性に刺激を受けた他の参加校の生徒たちも、言われたとおりに動くだけでなく、自分たちから進んで準備などに取り組むようになっていったのだ。配属校の3、4年生も、1、2年生の盛り上がりにも触発されて、放課後の練習を行うようになった。

そうして着任の1年3カ月後に迎えた2回目の運動会は、配属校の生徒が中心となって滞りなく進行。4校合同ということもあり、前回に増す盛り上がりを見せた。

配属校の1、2年生は運動会を主導したことで自信をつけたようだが、井崎さんに「今度は他校と一緒にスポーツ大会を開催したい」とリクエストしてきた。そうして任期の終盤には、配属校を含む5校による、フットサルを中心とするスポーツ大会が実現。準備のやり方は運動会のとおり同様、配属校の生徒が体育の授業で競技の腕を磨いては、他校を回って指導するというものだった。

「ぼくは体育教員になったら、この種目を教えたいと思っている。その道具はどうやってたら手に入るのか、教えてほしい」。井崎さんの帰国直前、運動会とスポーツ大会を経験した生徒のなかには、こう尋ねてくる生徒もいた。彼らが以後も運動会を継続してくれるはずだと思えた瞬間だった。

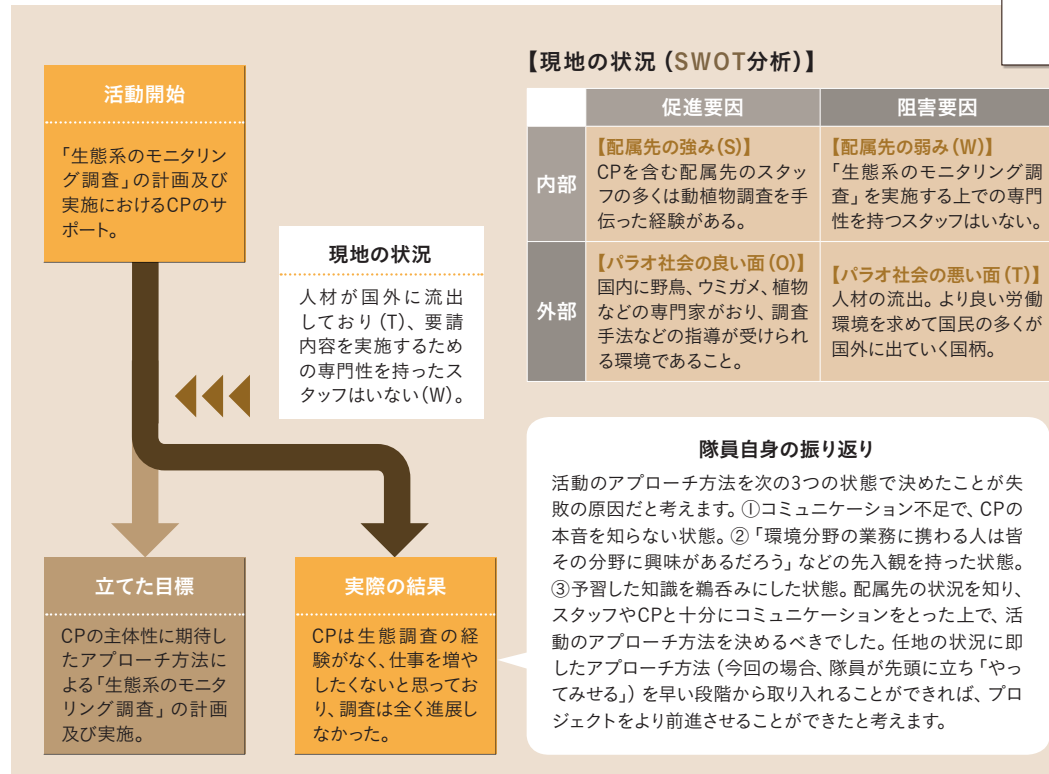
空回りした1回目の運動会

井崎さんが任期をおして力を入れたのは、「運動会」を定着させるための取り組みだ。「運動会を開催したい」と配属校の校長に提案し、了承を得ることができたのは、着任してわずか1、2カ月後のことだった。開催を予定したのは、その4カ月後。種目を選んだのは、「玉入れ」や「30人3脚」、「台風の目」など、日本で一般的なものだ。運動会に向けた練習は、体育授業がある1、2年生はその時間を使って行い、それ以外の学年は放課後に取り組んでもらおうと考えた。しかし、期待どおりに進まなかった。放課後の練習は参加する生徒がほとんどおらず、不成立。1、2年生の体育授業も、興味が持てない生徒たちの「見

“失敗”から 学ぶ #172



事例整理



他隊員の分析

率先垂範はやりすぎを避ける

私も任地ごとに適した活動のアプローチ方法があるのだと学びました。SWOT分析は強み・弱み・機会・脅威を知ることによって具体的な対策を打ちやすくなりますからどの隊員もやってみるといいと思います。CPや同僚の考え方や人間関係を早めには知ることは、その後の期間を有効に活用するために重要です。隊員が先頭に立ってやってみせることは時として必要です。隊員が離任した後も定着して継続されることを願っています。私も率先垂範に心がけ実行しましたが、「やりすぎ」は同僚のやる気や自主性に影響するので「適度」がポイントです。

文 = SV経験者

- 大洋州・マーケティング・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

水族館と国立博物館でそれぞれ約1年間、主に来館者数や売店・カフェの売り上げを増加させるための支援に従事。スタッフの心の内を「1対1」の対話で引き出し、活動に対する理解と協力を得ながら活動した。

主体性をひきだすとは……

「主体性をひきだす」にはCP自身の考え方や価値観を深く知ることが重要であり、それらは彼らの文化や社会背景に大きく根付いています。今回は、ご自身の「先入観」と「対話不足」により、その背景を知り理解するまでに時間を要したものと思います。私自身も、活動初期における対話による信頼関係の構築は、後々の活動の幅を大きく左右すると振り返っています。そのためにも、まずは彼らの文化に沿って積極的に行動を共にし、理解を深めるのもひとつの手段ではないでしょうか。それに伴い彼らの考え方をいち早く掴むことができるのだと思います。

文 = 協力隊経験者

- アジア・青少年活動・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

派遣国の養護施設と隣接する学校にて子どもたちに向けて日本文化や英語・算数などのクラブ活動を実施、平和学習や国際交流イベントなども開催した。

活動のアプローチ方法が任地の状況に 適しておらず、計画が進まない状態に

文 堀井大輔さん (パラオ・生態調査・2016年度3次隊)

私が配属されたコロール州政府の保全・法執行部は、世界遺産「ロックアイランド群と南ラグーン」を管理している。その世界遺産の生態調査は、国内外の組織や研究者によって不定期に行われており、配属先は長年それら調査のサポートを行っていた。コロール州政府から依頼された活動内容は「配属先のスタッフによる長期的な生態系のモニタリング調査の計画、実施、及びそれらのデータベース構築の支援」。ゼロからモニタリング調査の計画を立てることへの責任感とやりがいを感じながら活動を開始した。

任地に赴く前から、私は「同僚は十分な知識と経験があり、やる気もある」と勝手に考えていた。また、多くの協力隊経験者が「知識や経験を任地の人に押し付けるのではなく、任地の人から学ぶ姿勢を大切にすべきであり、実際に任地の人から多くのことを学んだ」旨の情報を発信していたので、「自分のやり方を押し付けてはいけない」という思いを強く持っていた。そのため、カウンセラーパート (以下、CP) の主体性を大切にし、隊員はあくまでもサポート役というアプローチ方法で活動に取り組んでいた。しかし、CPが能動的

に「生態系のモニタリング調査」の計画を立てる様子が見られず、プロジェクトが進まない状態が半年間続いた。CPとコミュニケーションを重ねることで、実はCPは生態調査に関係するバックグラウンドを持っていないことや、仕事を増やしたくないと考えていることを知った。成果が出ないことに焦りを感じた私は、「まずは隊員が主体となって活動し、CPにそれら一連の流れを経験してもらおう」と考え、活動のアプローチ方法を変更。配属後7カ月からは、私が先頭に立つてモニタリング調査の計画を立案し、各専門家と調整を重ね、配属後9カ月目にモニタリング調査を開始。この間、CPを置いてきぼりにしていた感じが強いが、配属後1年が過ぎた頃からCPも「生態系のモニタリング調査」自体に興味を持ち、徐々にプロジェクトの主導権をCPに移行することができた。

CPと十分にコミュニケーションが取れない状態で、思い込みを基に活動のアプローチ方法を決めたことが失敗であった。任地ごとに適した活動のアプローチ方法があることを学んだ。



隊員活動の最終日に、オフィス前の船着き場で、配属先のスタッフと記念撮影



PROFILE

1988年生まれ、滋賀県出身。広島大学大学院国際協力研究科に在学中にフィリピン大学の修士課程に交換留学。大学院修了後、建設コンサルタント会社に入社、環境コンサルタントとして主に環境アセスメント業務に従事。休職し、17年1月、協力隊に参加。19年1月に帰国。

活動概要

- パラオのコロール州政府の保全・法執行部において、配属先のスタッフによる世界遺産での長期的な生態系モニタリング調査の開始を目指し、主に以下の活動を行う。
- 野鳥・ウミガメ・植物等の調査の開始
 - Accessを用いたデータベースの作成
 - GISデータの整備 など

#H115

医療機器

派遣中 ▶ 4人

累計 ▶ 101人

分類 ▶ 保健・医療

活動例 ▶ 技術者の能力向上のための技
術移転 など

類似職種 ▶ -

※人数は、2019年5月31日現在。



配属先の同僚や病院スタッフと、透析の水処理装置のメンテナンスを行う小翠さん

PROFILE

1979年生まれ、大分県出身。2001年、大分臨床工学技術専門学校臨床工学技士学科を卒業。同年、臨床工学技士免許を取得し、病院やクリニックで計11年ほど勤務。主に透析業務を担当。16年10月、協力隊に参加。18年10月、帰国。

活動概要

ブータンの保健省に配属され、医療機器管理の向上を目指し、以下の活動を行う。

- 部品管理倉庫と作業場に5Sを導入
- 日本の医療機器メーカーとブータンのサプライヤーの明確化
- 医療機器分類の導入
- マニュアルの手配 など



話

こみどりかおり
小翠香織さん

(ブータン・2016年度2次隊)

#C107

病虫害対策

派遣中 ▶ 2人

累計 ▶ 117人

分類 ▶ 農林水産

活動例 ▶ 農作物や人間に害を与える病虫
害への対策 など

類似職種 ▶ 野菜栽培、食用作物・稲作栽培

※人数は、2019年5月31日現在。



畑の脇で路上販売されている、山川さんが病虫害対策を行ったサツマイモ（上の2段）。虫害対策の計画を作成する際は、「失敗できないプレッシャーがかかっていたことに加え、考慮すべき要素が多すぎて気疲れしました」と山川さん

PROFILE

東京都出身。東京農工大学大学院生物システム応用科学府博士後期課程修了(農学博士)、薬剤師。2015年7月、協力隊に参加。17年6月、帰国。

活動概要

ベトナム北西部のソララ省にて、コーヒーや甘藷の病虫害対策に従事する傍ら、派遣先のタイバック大学の教育研究活動の質向上を支援した。主な活動は以下のとおり。

- カウンターパートである教員と病虫害対策の計画・実施
- 農民・学生に対し、農業の適正使用に関する啓発活動
- 高等教育の質向上のため、学内の研究室整備や研究指導 など



話

やまかわ れい
山川 玲さん

(ベトナム・2015年度1次隊)

Q メインの活動は？

サツマイモ（甘藷）の虫害対策に特に力を入れました。配属先であるタイバック大学の付近にある農家では、甘藷は長期間貯蔵が可能で、加工性にも優れることから、地域の特産物になりうるという期待されていました。しかし、栽培技術も病虫害に対する知識・経験も浅く、収穫量が少ないことが問題でした。そこで、大学の教員とともに病虫害対策を実施。私の赴任時は、病虫害対策が全くなされていなかった状態だったので、被害の調査から始めました。調査の結果、約半数のイモがアリモドキゾウムシに被害を受け、売り物にならない状態であると確認されました。そこで、地域で調達できるもの、簡便性などを考慮に入れ、虫害対策を練りました。結果として、ゾウムシによる被害を15パーセントにまで減少させることができました。

Q 活動の最大の困難は？

主にコーヒーと甘藷の虫害対策を行いました。過去に地域で対策したことがなく、全くのゼロからのスタートでした。そのため、ある程度、試行錯誤しながら、地域に合った最適な方法を見つける必要がありました。しかし、対策の実施は、農民の生活がかかっている農地で行ったため、大きな失敗をすることはできない。そのことが、大きなプレッシャーでした。

Q メインの活動は？

医療機器の交換部品を保管している倉庫の5S活動が主でした。ブータンでは各病院やクリニックに臨床工学技士がおり、機器の修理やメンテナンスは配属先の保健省が行っていました。配属当初、故障した機器が放置されていて、チーフから機器の修理指導を依頼されましたが、多くのスタッフは部品とマニュアルがあれば修理できると考えており、「今は部品がないから修理できないだけ。技術指導は必要ない」とのことでした。この問題を解決するためには、修理ができる環境の整備が第一と考え、まず倉庫の全部品を把握し、部品を機器の種類ごとに分類しました。次に現在ブータンにある医療機器台帳を基に部品を選別し、リストを作成して棚卸を実施。ラベルと配置図をつくり、必要時、すぐに部品を探せる倉庫が完成しました。

Q 活動の最大の困難は？

5Sは地味で細かい作業が多く、結果もすぐに出ないので、スタッフのモチベーションを維持することが難しかったです。配属先は以前に5Sの導入を試みたものの断念したため、できないと考えている人が多く、また人手不足のため通常業務で手一杯。開始当初は、目新しさで多くのスタッフが協力してくれていましたが、3カ月後には、1人で作業することが増えました。

Q どう乗り越えましたか？

同僚と相談して、入念な計画を立てました。1番時間を要したのが情報収集です。諸外国におけるコーヒーや甘藷の病虫害対策の実践例をインターネットから入手。分厚いファイル1冊がいつぱいになりました。その上で、コスト性、調達性、簡便性などを考慮に入れ、最適と思われる方法を選定し、虫害対策の計画に組み込みました。計画がうまくいくよう、お寺で願掛けもしました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

私の場合は、害虫防除に関する技術導入に活動の重点を置きましたが、人材育成に重点を置くなどやり方はいろいろあると思います。例えば、開発途上国では化学農薬の不適切使用が問題となっていることから、安心・安全な野菜のニーズが高まっています。それに対する日本での取り組みを紹介することや、農業の適正使用について農民へ啓発活動を行うなど、座学的な活動を取り入れてもよいかもしれません。また、病虫害対策の実践には、日本だけでなく諸外国の知見も必要ですので、英語の文献が読めるとういでしょう。2年間で成果を出すのは難しいかと思いますが、次につながるよう（結果がどうであれ）記録を残すことも大切です。頑張ってください。

Q どう解決しましたか？

1つ目は、5Sの効果を実感してもらおうこと。使用頻度の高い機器から順に部品を整理したところ、1年後にはスタッフから「すぐに修理できた」「部品発注をすぐに行えた」と言われるようになった。2つ目は、手伝ってくれる人がいないときでも、実施内容と日程を伝え、ひとりでも進めていける許可を取っていただくことです。誰でもいつでも一緒に作業できる状況をつくり、手伝ってほしいと伝える一方、無理強いしないで根気よく待ちました。1年半後には、スタッフの意識が変わり始め、5Sを行うようになりました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

要請内容と違う活動を求められることや、やりたい活動ができないことも多いと思います。私も病院での作業は少なく、メンテナンスもほとんどできませんでしたが、医療機器の使用前後の点検や定期点検の必要性を伝えたり、管理システムをつくらせる作業は日本ではあまりできない経験だと思っています。その責任の重さに悩むこともありましたが、配属先の同僚や現地のJICAスタッフ、日本にいる同職種の方の助言や支えがあり、乗り越えられました。ひとりで悩まずに多くの方から助言をもらい、その国に合ったやり方を根気よく探してみてください。

before
大学生

after
県庁職員



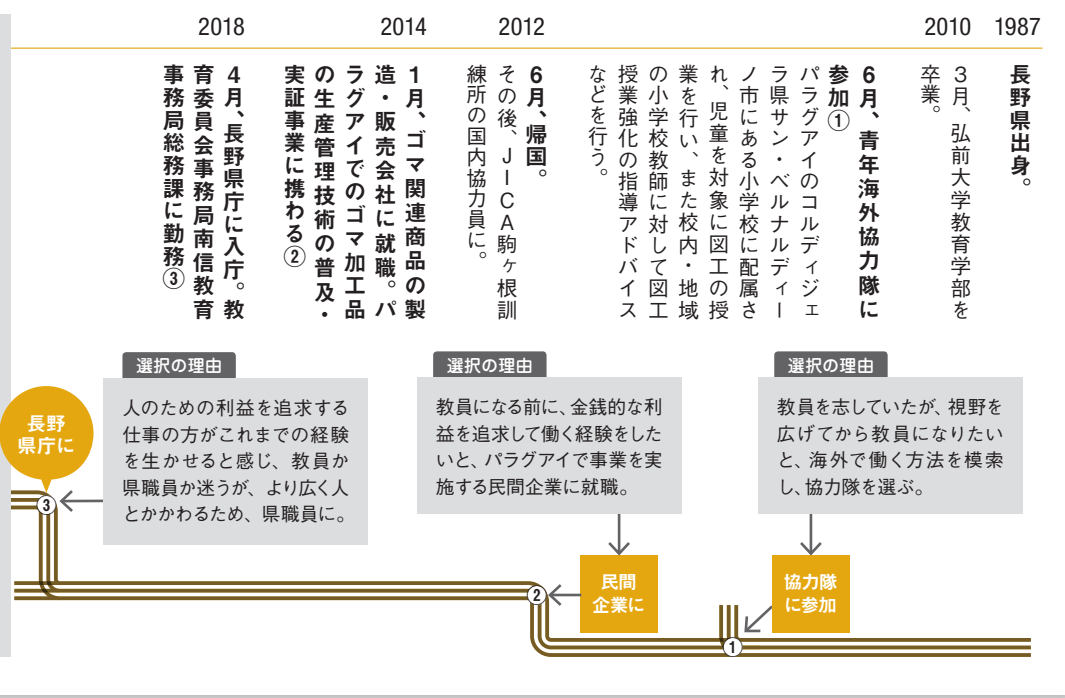
after

現在の勤務先である長野県伊那市合同庁舎。勤務して1年半、与えられた仕事を確実にこなすことが最優先だが、仕事の本質を考えて働くように心がけている。「決められた仕事にどういう意味があるのか、常に考えるようにしています。疑問があれば、周田と相談して改善する。職場の人たちと考えにズレがないように、できるだけ話したり、一緒にご飯を食べたりして、かかわりを増やすことを大切にしています」

吉田さんのプロフィール

協力隊に参加して気づいた日本人としての責任感

任地の人たちは私を家族の一員として受け入れてくれ、活動でも私の意見を取り入れ、力を貸してくれました。私を受け入れてくれた理由は、これまでに移住された日系人の方々が築きあげた信頼と、先輩隊員の力があつたからだと思えます。活動中、任地にいた日本人は私ひとりだったので、現地の人にとっては「私=すべての日本人」です。自分がいいことをすれば、「日本人はいい人だ」と思われるし、逆もまた然り。そう思ったとき、日本人としての責任感を持って活動をしなければと、より真剣に取り組むようになりました。海外で生活しなければ気づけなかったことだったと思います。



長野県庁に

選択の理由

人のための利益を追求する仕事の方がこれまでの経験を生かせると感じ、教員が県職員か迷うが、より広く人とかわるため、県職員に。

選択の理由

教員になる前に、金銭的な利益を追求して働く経験をしたと、パラグアイで事業を実施する民間企業に就職。

選択の理由

教員を志していたが、視野を広げてから教員になりたいと、海外で働く方法を模索し、協力隊を選ぶ。

帰国後、教員になる前に協力隊の経験を直接生かそうと駒ヶ根訓練所に勤務し、そのとき、パラグアイへの進出を考えている食品メーカーの社長と出会う。社長に誘われて同社に就職し、パラグアイでつくられる換金作物の6次産業化と現地の人への食文化普及・実証事業に携わった。仕事としてパラグアイ

経験を重ねて気づいた思い

と数十人の親戚が必ず集まり、その場に吉田さんも毎週招かれたそう。たわいない話をし、子どもたちと遊び、吉田さんは折り紙を教え、代わりに現地の言葉を教えてもらう。2年間、変わらずに続いた日常で、特別なことはなにもない。しかし、ただそこにいることで吉田さんは「この国が好きだ」と心から感じるようになっていった。



パラグアイの小学校で授業を行う吉田さん

人をつなぐ「場」となる

パラグアイ・小学校教諭・2010年度1次隊
よしだ たろう
吉田 太郎さん

長野県から早く出ていきたかった。「今思えば好きの裏返し」と吉田さんは話すが、当時は田舎すぎる地元から出て行きたくて、まず、県外の大学に進学。子どもが好きで、小学校教諭になるため教育学部を選んだ。在学中、ゼミの先生に勧められ、中華人民共和国に1年間留学し、そのとき吉田さんは経験する大切さを肌で感じるようになる。苦手だった中国人の大きな声は発音するのに必要だと知ったこと。反日感情に不安を抱いていたが「日本から来たら兄弟も同然」と言われたこと。知らないことの多さと、学校という枠から出ずに教員となることに不安を覚え、帰国後、未知の場所で経験を積める活動を探したところ、協力隊が当てはまった。

教員になる経験を積むために

教員を目指していた吉田太郎さんは、大学卒業後、協力隊に参加し、パラグアイで小学校教諭として活動。帰国後は民間企業に籍を置き、パラグアイで実施される事業に携わった。その後、教育より大きな枠組みで人に役立ちたいと長野県に就職。現在は、伊那市にある教育委員会事務局に勤務している。

パラグアイの小学校に派遣された吉田さんは、任地で指導方法が確立されていない図画工作（以下、図工）について、児童への授業の実施と、教員へ教授方法を伝える活動に従事した。配属当初、吉田さんは図工の授業を実施すべきか迷ったという。児童数に比べ学校と教員の数が圧倒的に足りないため、授業時間が少ない。そこに図工は必要だろうか：「まずは教員の本音を知ること注力した。話してみると教員は「授業を受けたことがないから教え方がわからない」「私たちは不器用だから」と、授業の実施に二の足を踏んでいることがわかった。そこで吉田さんは、簡単に見栄えのする工作を児童に紹介し、児童が工作をする姿を教員に見てもらうことにした。児童が楽しんで色を塗る姿や、普段の授業では勉強が不得意な児童が集中して絵を描く姿。その姿に教員は図工の意義を感じてくれた。その後、教員に対する図工授業の講習会を開催し、授業は現地に受け入れられていった。「現地の先生は図工の知識がなかっただけで授業運営はとても上手、私の方が勉強になった」と吉田さんは振り返る。生活でも発見があった。吉田さんがホームステイをしていた副校長の家では、週末にな

の人たちにかかわったことで改めて知ったのは、自分たちの国を自分たちの手で改善したいという強い志だ。それに触れ、自分の大切なものも彼らのように自分の生まれ育った場所にあるということに吉田さんは気づく。プロジェクト終了と同時に退職し、地元長野県に帰り、県で働くことを決意した。「教員として子どもに何かを伝え、役立ちたいと考えていましたが、経験をj経てその対象が長野県全体に広がった。県で働けば、いずれ子どもたちにもつながると思いました」現在は、伊那市にある教育委員会事務局南信教育事務局に勤務し、主に学校事務の給与や手当関係の補助業務を担当している。事務的な仕事は、型にはめたやり方で乗り切ることもできるが、相手の立場で考え、相手に寄り添って対応するように努めている。そうできるのは、現状を知り、適切な方法を伝え、相手に受け入れてもらったという協力隊での経験があったからだ。現状を把握するためにも、現場の先生たちと同僚たちとできるだけ話をする機会を持つように心がけている。休日、子どもに向けたスペイン語での絵本の読み聞かせや、外国人に向けた日本語ポランテアとしても活動している。吉田さんが暮らす地域には外国人労働者や在日外国人も多く、彼らにとっても暮らしやすい町でありたい。その根源にあるのは、パラグアイでの家族たちとの思い出という。「特別なことでなく日常のなかで集まり、人とながれる場。あの場があったから、私は寂しい思いをせず、楽しい記憶と経験をパラグアイからもらえました。そういう場をつくるっていい人間になりたいと思います」



理想 現実

帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第⑦回 観光分野 篇

帰国後のあゆみ

A 派遣前は、地方の町のDMO職員として^{*}着地型商品や観光客向けイベントの企画などを担当していました。協力隊時代の活動は、日本人観光客の誘致に向けたプロモーションです。派遣前も協力隊時代も、携わっていたのは「地域づくり」の側面を持つ公的・私的の強い観光業であり、好きな分野です。しかし、協力隊時代に「地域づくり」もビジネス感覚をしっかりと持たなければうまくいかない」ということを実感しました。そのため、帰国後はビジネス感覚を磨く意図で、民間の旅行会社を就職先に選びました。4年あまり東京の本社に籍を置き、海外へのスタディツアーの企画などに携わったのですが、今年の4月には観光学を学ぶために地方の大学院に入学し、それに合わせて仕事も大学院に近い支店への勤務に変えてもらい、「二足のわらじ」を履き始めました。

B 私は鉄道会社の社員として協力隊に現職参加しています。派遣前は地方で駅員や車掌を務めていたのですが、駅員を務めていた駅が地域の観光振興の拠点となっていたため、観光客向けイベントの開催などにかかわるチャンスがあり、そこから「観光」の仕事への興味も湧いてきました。協力隊に参加したのも、観光部門に異動できるよう、キャリアを寄せていきたいと考えたからです。協力隊では観光振興などに携わっています。海外を経験したことで、逆に日本の「地域」の魅力を感じるようになったので、観光部門に異動したいという思いはより強くなったのですが、帰国後は車掌として復職し、そのまま今に至ります。

C 私は地方自治体に一般行政職として勤務した後に、協力隊に現職参加しています。動させてもらうためには、観光に関する「理論」を身につけていたほうがいいだろうと思ったのですが、大学時代に勉強したのは観光とは関係がない学問だったからです。結局、社内選考の面接で落ちてしまったのですが、毎年1回応募があるので、今後もチャンスを狙いたいとは思っています。Aさんの学費は自前でしょうか。

A 勤務先には学費を負担してもらえないような制度はなかったのですが、すべて自費です。私は協力隊時代に、「観光客が増えなくても、現地に残るのはゴミばかり」という途上国の観光の現実を目の当たりにしました。その解決策を見つければ容易ではなく、帰国後、日本人観光客を途上国に引率する仕事をしていても、モヤモヤは消えません。「観光客と観光地の両サイドが幸せになれる」という理想をどこかでパロディ的に実現することができたらとても大きな達成感を得ることができるだろうと思っただけなのですが、それを現実にするためには、やはり観光に関する理論を身につけていることが必要だと考え、進学を決めました。私も大学時代の専攻はほかの分野でした。

C 私も大学で学んだのは観光学ではなかったのですが、現在、大学院に進学してその専門性を身に付けたいという欲求はとも強いですが、協力隊経験を「理論」で裏打ちしたいという思いもあります。現在の担当業務では肩書的にも「観光学」の修士号は強みになるからです。Aさんが働きながら大学院に通われていると伺い、「そういうやり方もあるのだな」と刺激になります。

今後の展望

B 「観光客が増えなくても、現地に残るのはゴミばかり」というAさんのお話は、私も

す。職種は「観光」ですが、派遣前に観光部門で働いたことはありませんでした。「町役場の観光推進基本計画の策定」という、一般行政職の経験が必要な申請内容だったことから、私がマッチングされたのだらうと思います。帰国後はインバウンドを所管する観光部門に異動となり、アジアや中東の国々をターゲットとする観光プロモーションを担当しています。

協力隊経験の生かし方

B おふたりとも協力隊経験が生かしやすい仕事に携わることができているので、とてもうれしく感じます。

C 私は就職した当初から人事ヒアリングで「海外勤務を希望」と言い続けてきたくらいですので、帰国後にまた「ザ・事務」のような部署に配属されていたら、やはりジレンマに苦しんでいただろうと思います。今の業務に協力隊経験がどう役立っているかという点については、外国人も日本人と共通する部分があると知り、彼らとの関係づくりが苦勞なくできるようになったことが一番だと感じています。

A 私も、今の勤務先に就職して最初に配属されたのが、スタディツアーなどニッチなマーケットを狙う部署だったからこそ、協力隊経験者の私を歓迎してもらいましたが、もしほかの部署の配属だったら、そうはいかなかったかもしれないと思います。私の派遣国は、日本人のツアーがビジネスとして成立するよう国ではないからです。しかし、そのような国に派遣されたからこそ、そこで暮らした経験を社内での私のアイデンティティの確立につながるべきだろうと考え、入社以来、派遣国へのツアーを実現しようと努めました。そうして入

協力隊時代に感じたところであり、そうではない観光地をつくる仕事をしたという気持ちは私にもあります。しかし、例えば自分で会社を立ち上げてそれを実現できるかというと、「当たるも八卦、当たらぬも八卦」の世界なのだろうと腰が引けてしまふ。ですので、やはり今の勤務先の中でそのような仕事に就けるよう努めるのが現実的だろうと考えています。幸い、勤務先は今、「少子化による鉄道利用者の減少」や「人材不足」といった背景から、「公募制の異動」を増やし、各社員が秘める力を引き出すという流れになってきていますので、望みはあるかなと思っています。

A 私は大学院を修了した後、「観光コンサルタント」のような立場で観光地域づくりにかかわりたいと思っています。旅行会社がこれまであまりやってこなかった仕事ですが、増加するインバウンドを日本の地方創生にどう結びつけるかという課題は、旅行会社もなんらかの対応をしていかなければならない時代です。そのため、今の勤務先の社員の立場でも、そうした仕事を実現できるようになる可能性もあると考えています。

C 私は今の担当業務にはやりがいを感じられるのですが、やはり自治体なので異動はつきものですね。しかし、おそろしく人材育成の意図からだと思うのですが、勤務先では異動のスペンが長くなる傾向にあります。そうすると、専門性をさらに磨き、観光部門になくてはならないプロフェッショナルになることで、今の部署に長く配属されたり、たびたび戻ってきたりすることも可能になってくるかもしれません。それを実現するためにも、今の部署で担当国との間のコネクションを強めたり、先ほどのお話のように大学院で理論を学んだりして、自分の力を磨いていこうと思っています。

Cさん(男性)

【派遣前】
地方自治体の一般行政職
【協力隊】
▶現職参加
▶観光・アジア・2016年度派遣
▶観光推進基本計画の策定などに従事
【現在】
地方自治体に復職

Bさん(女性)

【派遣前】
鉄道会社に勤務
【協力隊】
▶現職参加
▶観光・中南米・2016年度派遣
▶観光振興や土産物開発などに従事
【現在】
鉄道会社に復職

Aさん(女性)

【派遣前】
DMO^{*1}に勤務
【協力隊】
▶退職参加
▶観光業・大洋州・2011年度派遣
▶日本人観光客の誘致に向けたプロモーションなどに従事
【現在】
旅行会社に勤務

*1 DMO…「Destination Management Organization」の略。観光地域づくりの舵取り役として、地域の多様な関係者と協働しながら、戦略の立案やその実施に向けた調整などを行う法人。
*2 着地型商品…旅行者を受け入れる観光地の側で企画されるツアーなどの旅行商品。
*3 インバウンド…外国からの訪日旅行。

社1年目に、派遣国へのツアーを企画したのですが、申し込みが最小催行人数に足りず、実施することができませんでした。その後、社内で「私はあの国に日本人を連れて行きたいのです」ということを盛んに発信していたら、役立ちそうな情報が同僚たちから私に集まるようになり、それをもとに新たな切り口で派遣国へのスタディツアーを企画したところ、ようやく入社3年目に入るあたりで実現に漕ぎ着けることができました。

B 私は「帰国して1年以内に協力隊経験が生かせる部署への異動を叶えよう」と考えていたのですが、今のお話を伺い、「もう少し長い目で見てがんばらなければ」と反省しました。私も帰国してからこれまで手をこまねいていたわけではなく、車掌としての本来業務のかたわら、「A」によって鉄道の仕事はどのように変わるか」について学ぶ社内の勉強会を企画、実施するなど、職場の課題をみずから探し、その解決に取り組んだりもしてきました。すると、直属の上司は「さすが協力隊を経験しただけあるね」などと言って持ち上げてくれるのですが、なかなか実際の人事異動には結びつかない。「この社員の力をぜひ生かそう」と判断してもらったためには、与えられた職務で実績を積み重ね、「これまで確実に業務をこなしてきた」という信頼を得ることも必要なのだと、ようやく最近になって理解できるようになってきたところです。

ブラッシュアップに向けて

B Aさんは現在、大学院で観光学を研究されているとのことですが、実は私も帰国後、観光学を学ぶために勤務先の「社費留学制度」に応募したことがあります。観光部門に異

生活に役立つ技

あるもので思い出の味

ナビゲーター = 西島百合子さん
(ガーナ・PCインストラクター・2015年度4次隊)

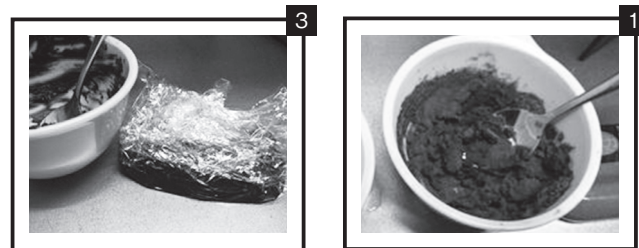
生クリーム不要の生チョコ

材料はカカオパウダーとハチミツの2つのみ! 特別な材料や道具はいりません。2つを混ぜて冷蔵庫で固めるだけ。口の中に入れると優しくとろけて、とろーっと広がるチョコの甘み、懐かしい生チョコの味にぜひ癒やされてください。カカオはリラックス効果や便通改善、ハチミツは保湿効果と食べるサプリメントと言われるくらい栄養成分がたっぷりあるので、この生チョコは私たちが任地で活動するためにはとても役立つ栄養レシピでもあります。私の任地であるガーナはカカオの生産の生産地として有名です。生クリームは手に入りませんが、カカオとハチミツは簡単に手に入ったので、とてもお手軽につくれる生チョコでした。日本から持って行っても保管しやすい材料なので、ぜひ試してみてください。ただし、食べ過ぎてしまうと逆に太って不健康になるので要注意!

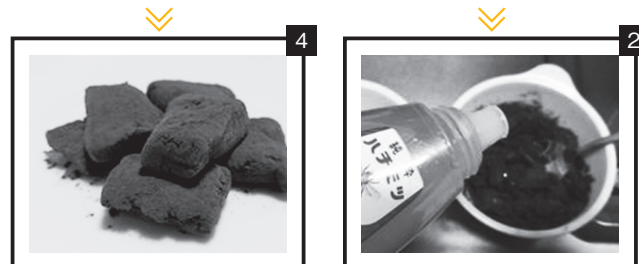
つのおハチミツは任地から買いました

【材料】

- ハチミツ…小さじ3~4 (お好みで)
- 純カカオパウダー(ココア) …小さじ山盛り5
- お湯…小さじ5



①適当に生チョコっぽい厚さでラップにくるみ、冷蔵庫で冷やす。



②固まったら包丁などでカットし、お好みでココアパウダーを振りかければ完成。自分のテンションを上げるためにお店で買ったかのような形と見た目にする!

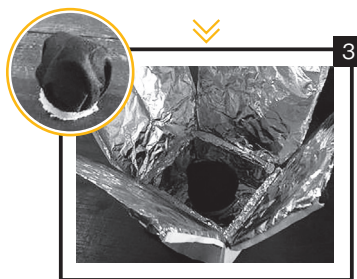
活動に役立つアイデア

太陽光の利用法

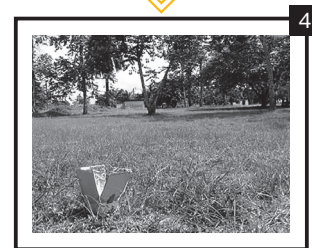
ナビゲーター = 宮崎貴芳さん
(ガーナ・電子工学・2014年度2次隊)

太陽光でゆで卵

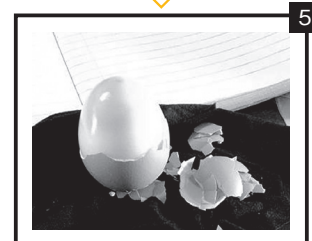
活動中は太陽光発電の技術指導をしていましたが、太陽光の別の利用法で先生・生徒がアツと驚くことをしたい! と思い、太陽光でゆで卵をつくる実験をしました。光を卵に集めるのがポイントで、赤道に近い国だと日差しも強く、よりつくりやすいのではと思います。材料選びには「簡単で安く、理にかなう」を意識しました。実験中は生徒が休み時間に見に来たり、熱くなった卵に驚いたり、そして生徒のひとりが「これで携帯電話は充電できるのか?」と質問に来たりしたのが印象的でした。ソーラークッカーは専門のサイトもありますので、ぜひオリジナルなものをつくっていただきたいね。



③温めと保温のため黒い布で卵を包み、トイレトペーパーの芯を横に切るなどして卵の台座を作成。それを②に入れる。



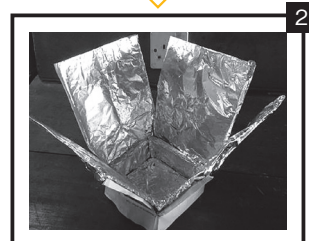
④外に2~3時間置く。太陽の光に合わせてときどき向きを変える。午前10時~午後2時が光も強くおすすめ。



⑤完成。うまくできなかったときは「どう工夫したらできるか」を先生や生徒と考える、再度挑戦してみてください。



①卵へ光を集める道具(ソーラークッカー)をつくる。A4の紙で箱を折ってアルミホイルで包む。



②中心に光を集めるためのパネルを、紙とアルミホイルでつくる。倒れないよう段ボールで補強し、粘着テープを貼る。

活動に役立つアイデア

好きな布でエコバッグをつくろう!

ナビゲーター = 田原 彩さん(エジプト・手工芸・2017年度1次隊)

袋縫いでつくる仕上がりがきれいなエコバッグ

ロックミシンやジグザグミシンがなくても、縫い目を隠せる袋縫いは、仕上がりがきれいで、ほつれも気になりません。ミシンで縫う回数は多いですが、工程は、①仕上がり線を引いた布をカットする②持ち手をつくる③ポケットをつくる④本体をつくり、持ち手とポケットを付けたら4工程で単純です。ポイントは、布にガイドとなる仕上がり線を書くこと。ここエジプトでもビニール袋削減のため、エコバッグが推奨されています。任地のお気に入りの布を使ってぜひエコバッグをつくっててください。ポケットに収納できることを説明するとびっくりすること間違いなしです!

- 【用意するもの】**(バッグの仕上がりサイズ: タテ46cm×ヨコ44cm(持ち手65cm)程度)
- 布…タテ110cm×ヨコ80cm程度
 - 糸
 - ミシン(なければ手縫い用の針)
 - はさみ
 - 定規
 - 線を引くチャコ(鉛筆や石鹸でも可能)
 - ループ返し(持ち手作成で使用。なければ代用品でも可能)
 - マチ針

②【ポケット】をつくる。短辺の下がポケット口になるので、3つ折り(2回折る)にし、点線部分にミシンをかける(下から約8mm)。

③(A)の印線まで、折り上げる。両端から約7mmをミシンで縫う(縦の点線部分)。縫うときは、底からポケットの口に向けて縫う。

④縫い目を切らないように余分な縫い代をカットし(左右両方)、ひっくり返す。裏から縫い代がくるまるように仕上がり線(点線部分)をミシンで縫う。

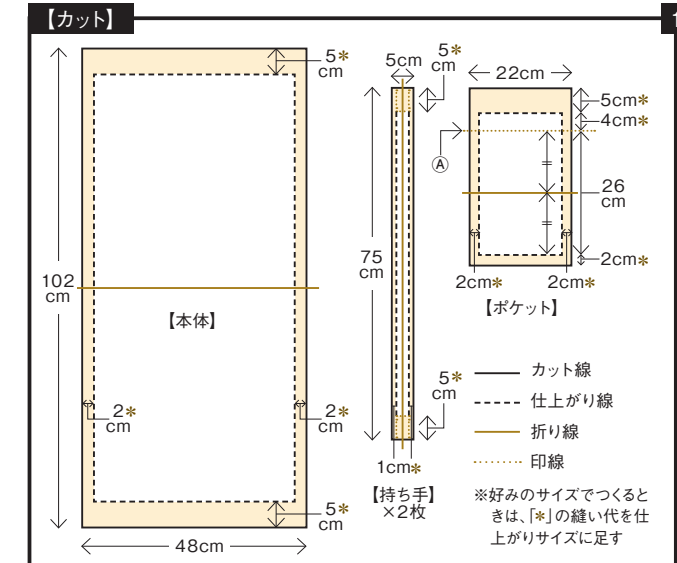
⑤もう一度裏に返し、上の部分を中心に向かって2つ折りし、点線部分をミシンで縫う。

⑥【本体】をつくる。本体を2つ折りの袋状にし(表面が外側)、両端から約7mmをミシンで縫う(点線部分)。余分な縫い代をカットし(左右両方)、ひっくり返す。仕上がり線を底からミシンで縫う。

⑦【全体】を合わせる。ポケットの中心と本体の中心を合わせて置き、ポケットの横に持ち手がくるように置く。

⑧反対側の持ち手も⑦と同じ位置に置いたら、持ち手とポケットをくるむように、本体上部を3つ折り(2回折る)にし、マチ針で止める。点線部分をミシンで縫う。

⑨持ち手を上に返し、本体上部と重なる部分を、四角と×印に縫い止めたら完成。



単位 = cm	本体		持ち手		ポケット	
	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ	タテ	ヨコ
カットサイズ	102	48	75	5	37	22
仕上がりサイズ	92	44	65	3	13(17)	18

交通安全

一道を通行するときは十二分に気をつけて

道路を通行中の交通事故

事例1：自転車で帰宅中……

配属先の仲間の昼食会に参加した際、アルコールを摂取した。昼食後、自転車で帰宅途中、坂道でスピードが出すぎて転倒し、大けがを負った。

事例2：日課のジョギング中……

毎日のジョギングをイヤホンをつけ、音楽を聴きながら行っている最中、後ろから突然、走行中の車に追突され、けがを負った。

安全管理担当者からのアドバイス

自転車を乗用して何かの会に参加する際は、アルコールの摂取を厳に控えるようにしてください。また、断り切れずアルコールを摂取した場合は、自転車に乗車するのではなく、自転車を手で引いて帰宅するようにしてください。さらに言えば、アルコールを摂取する可能性のある場合は、そもそも徒歩か公共の交通機関を利用して会場に向かうよ

うに心掛けてください。自転車は便利な移動手段ですが、運転中、何かの事故に巻き込まれると大けがにつながりやすい乗り物でもあることに注意が必要です。

開発途上地域の道路では、日本では考えられないほど交通マナーが徹底されていないことや、路肩の舗装状況も悪い状態にありますので、走行中の左右確認はもとより、十二分に気を付ける必要があります。

派遣国滞在中、適度なストレス発散は大切なことですが、道路を自転車やジョギング等で通行する場合には、普段以上に、前後左右、そして自身の体調管理に注意する必要があります（自転車のサドルの高さを自分の体に合った状態に保つことも大切な留意事項です）。このため、日本では当たり前になっているイヤホン付きのジョギングを避ける必要がありますし、飲酒を伴う自転車の運転は日本で禁じられているように、派遣国でも厳に避けるよう注意を払い、元気で安全な任期を全うできるよう心掛けてください。

いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

7月14日 職種NAVI

～協力隊の職種をご紹介します!～

「自分に合った職種って何?」そんな疑問・不安を解消すべく、人気職種に特化したセミナーを開催します。内容は、専門の先生による応募に向けたアドバイス、協力隊経験者の体験談発表、個別相談など。

- いつ? 7月14日(日) 10:00～17:30
- どこ? JICA地球ひろば(東京都新宿区)
- 詳細 JICA海外協力隊ウェブサイトにて公開予定

東京

7月20日

リハビリテーション分野で国際協力を行うための JICA海外協力隊セミナー

鈴木恵祐さん(コロンビア・作業療法士・2016年度4次隊(ニカラガアからの振替派遣))と柳瀬友梨香さん(ベトナム・理学療法士・2016年度2次隊)が、専門的な関心や疑問に応えるためのセミナーを開催。

- いつ? 7月20日(土) 14:00～17:00、先着順(定員20人)
- どこ? メルパルク京都地下IF京都府国際センター(京都駅前すぐ)
- 詳細 https://www.jica.go.jp/kansai/event/2019/190527_01.html

京都

7月20日 おいしく学ぶ、世界の暮らし～パラグアイ編～

長谷川辰雄さん(パラグアイ・野菜・1991年度1次隊)によるパラグアイの生活や文化の話聞きながら、その土地の料理を楽しむことができます。一部の料理のレシピをお土産としてご用意しています。

- いつ? 7月20日(土) 12:30～13:30(申込締切:7月5日(金))
- どこ? JICA二本松(福島県二本松市)
- その他 先着順(定員30人)、参加費:700円(当日集金)

福島

7月26日 食品加工技術×SDGsセミナー

JICA沖縄で民間連携事業を担当する米里吉則さん(スリランカ・空手道・1985年度1次隊)と、サラヤ株式会社海外事業部アフリカ開発室副室長の森窓可さん(ネパール・小学校教諭・2004年度2次隊)が登場。

- いつ? 7月26日(金) 13:30～16:00
- どこ? JICA沖縄(沖縄県浦添市)
- その他 申し込み締め切りは、7月25日(木)

沖縄

連絡先やURLの記載がないものは、開催場所の国内拠点のウェブサイトをご覧ください。<https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/index.html>

著作権と肖像権に関する注意

Facebook、YouTube、Twitter、Instagram、ブログなどインターネットの多様なサービスで手軽に情報を入手したり、発信したりできるようになりました。しかし、文章、画像やイラスト、デザイン、音楽などには著作権、また写真や絵画などには肖像権などが存在します。このような権利について適切な処理を行わずに使用してしまった場合、知らない間に他人の権利を侵害してしまう恐れがあり、損害賠償を請求されることもあります。

自由な使用が認められていない素材を使うときは、必ず権利者に許可を取り、迷った場合は各在外事務所にご相談するなど、取り扱いには十分注意しましょう。

帰国後の進路を考える 帰国後研修、帰国報告・交流会の開催

5月18～21日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで帰国後研修を開催し、66人の帰国したJICA海外協力隊が参加しました。この研修は、隊員経験を帰国後どのように生



交流会の様子

かすかをじっくり考える内容になっています。

また、帰国後研修の後に行われる帰国報告・交流会には、隊員の活用に関心を持っている自治体や企業などの関係者が参加し、自治体向けの会に20団体、企業向けの会に60団体が参加しました。参加団体や企業からは「多くの帰国隊員の方々に弊社の事業に興味を持っていただき、直接お話ができて良かった」との感想があり、帰国隊員の採用に非常に高い関心を持っていることがうかがえました。この交流会をきっかけに参加自治体・企業の研究を始め、就職に至ったケースも少なくありません。

本研修・交流会について、各隊員には帰国直前に在外事務所を通じて案内していますが、進路開拓中の帰国隊員も参加可能です。詳細については、下記メールアドレスにお問い合わせください。

▶JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課
jvtpc-sinrosien5@jica.go.jp

今回の帰国後研修、帰国報告会・交流会の予定

帰国後研修	日程	場所
教育現場復帰コース	8月17日、18日	JICA市ヶ谷ビル
職場復帰コース	8月24日、25日	JICA市ヶ谷ビル
進路開拓コース	8月24～27日	JICA市ヶ谷ビル
帰国報告会・交流会	日程	場所
自治体・団体向け	8月27日	JICA市ヶ谷ビル
企業向け	8月28日	JICA市ヶ谷ビル

JICA海外協力隊(短期派遣)の募集

JICA海外協力隊(短期派遣)の第1回募集は、7月31日から応募受付を開始します。派遣期間は1カ月～1年未満。二次選考までに当初任期を満了し、面接が可能な派遣中のJICA海外協力隊の方も応募が可能です! 詳しくは以下のウェブサイトをご覧ください。

- ▶JICA海外協力隊ウェブサイト「短期(一般案件)」
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-seinen/>
- ▶JICA海外協力隊ウェブサイト「短期(シニア案件)」
<https://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-senior/>

回	募集期間	派遣時期
第1回	7月31日～8月25日	12月中旬以降
第2回	11月8日～12月1日	2020年3月末以降

JICA青年海外協力隊事務局 技術顧問の着任

2019年6月に、新しいJICA青年海外協力隊事務局技術顧問が着任しました。

氏名	担当分野
鶴巻景子 (つるまきけいこ)	小学校教育、教育行政・学校運営

2019年秋募集へのご協力をお願い

より多くの方にJICA海外協力隊を知っていただくために、みなさまのお力をお貸しください!

お勤め先、お知り合いのお店、町内会掲示板などへのポスターの掲示にご協力いただける方は、Eメール、FAXまたは郵送にてお申込みください。

※送付枚数が上限に達した時点で、受付を締め切らせていただく場合がございます。

- 送付物:
2019年秋募集広報用ポスター(B3サイズ:364mm×515mm)
- 送付時期:
2019年8月中旬予定(折り畳んだ状態で送ります)
- 申し込み・問い合わせ先:
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
JICA青年海外協力隊事務局
Email: jvtrd@jica.go.jp
FAX: 03-5226-6379

- ご連絡いただく内容
件名: 2019年秋募集ポスター申込
本文: ①お名前
②ご住所(ポスター送付先、日本国内のみ)
③ご希望枚数(お1人3枚まで)



「自分が世界を変える力になる。青年海外協力隊。シニア海外協力隊。秋募集 8/20・9/20」
必ずWebサイトへアクセス! JICAのロゴマークは、2019年秋募集ポスター(デザインは変更になる場合があります)

つぶやき

お題 ▶ 最新技術



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

驚異のモバイル送金サービス

派遣国に住んでいたら都会でも田舎でも知らない人は少ないであろう、モバイル送金サービス。携帯電話で送金や引き出しをするシステムですが、これがすごい。お金はチャージ式で電話番号があれば銀行口座がなくてもOK。ガラケーでもネット環境がなくても使え、個人間での送金、お店での決済、公共料金の支払い、バスの予約と振り込みまで……開発途上国の口座保有率の低さを逆手にとった最新技術だろう。

ペンネーム：reimondさん（女性） 協力隊員（アフリカ・栄養士・2018年度派遣）

★危機のときには……

任地である首都では、たくさんの車が往来する中、荷台や人を乗せたロバも街中を闊歩している。車に乗っているとロバは遅いし暑いし……と思っていたが、ガソリン不足に見舞われたとき、バスがなくて仕方なく歩く人々や、ガソリンスタンドに並ぶ長蛇の列の車を横目に、闊歩するロバ。危機のときにはやはり「ローテク」ならぬ「ロバテク」が強いのだと実感した。

ペンネーム：畜産の七不思議さん（女性）
協力隊経験者（アフリカ・環境教育・2016年度派遣）

★★人が温かいと心も温まる

派遣国では、電車、高速道路などの整備が順調に進んでいる。現在は、バスでの移動が一般的だが、いつも満席で座れない。この状況だとイライラするかもしれないが、ここは違う。座っている人が、立っている人の荷物を持ってあげる。最新技術が導入されつつ、思いやりの行動も世界で広まってほしい。

ペンネーム：モヒンガ〜さん（女性）
協力隊員
（アジア・PCインストラクター・2018年度派遣）

★★★フレンドリーな笑顔

地域のものづくり工房にやって来た3Dプリンター。誰でも使っていいのですが、やや気後れする地元の人々。そこで活躍するのが工房スタッフ。このマシンにできることや操作方法を簡単な言葉で教えてください。そのフレンドリーな笑顔に、どんな最新技術も支えるのは人なんだなあとおほこり。

ペンネーム：帽子は髪の一部さん（女性）
協力隊員（アジア・デザイン・2018年度派遣）

募集中のお題

「知恵袋」「おまじない」「原動力」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?



JICA進路相談カウンセラー／ 青年海外協力隊相談役の紹介



今月の相談 (就活編)

よくある相談に進路相談カウンセラー／
青年海外協力隊相談役がお答えします。

Q. 集団討論にはどのように
臨めばよいでしょうか。

A. 「討論」が「鬭論」にならない
ように注意しましょう。

公務員試験でよく行われる集団討論。苦手としている方も多いようです。人前で話すのは恥ずかしいから、議論が苦手だからと避けては合格できません。集団討論の流れとしては①会場で(または入室前に)テーマが示される②テーマについて考える③自分の意見を発表④集団討論のパターンが多いようです。テーマが示されたらそのテーマの出題の意図や問題点、自分としてどのように解決していくのかなどを考えましょう。集団討論の場では結論から話し、人の発表の際には軽くうなずき、良いところは褒めます。自分が話すときは全体を見ながらゆっくりと話す。意見が違って否定せずに、まずは受容してください。集団討論は勝ち負けではなく、参加者の意見をまとめてより高い解決策を見つけて出す共同作業です。職場の中の一員としての意識をもって討論に臨んでください。

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役
に、進路・就活の悩みなど、いつでもご相談ください。



おかだ ひろあき

岡田弘明さん(青年海外協力隊相談役)

担当地域: 福岡・佐賀・長崎

✉ jicakicp-cs1@jica.go.jp

●経歴: 福岡県庁で通商・香港駐在・国際交流・国立博物館対策・生活労働業務などに携わった後、日本赤十字社福岡県支部に勤務。2012年にJICA進路相談カウンセラーに就任し、現在は青年海外協力隊相談役。

私が初めて帰国隊員の方にお会いしたのは、今から33年前のことです。募集説明会の体験談の面白さに引き込まれ、その豊かな人間性に感心をしました。その思いは今も変わりません。皆さんは誰もがまねのできない経験をされ、その経験からさまざまな力を培われています。近年、グローバル化が急速に進展する中で、企業も自治体も協力隊経験者のようなたくましい精神力と多様性に富む人材を求めています。自治体の採用試験においては協力隊等の経験者に対して特別措置を講じているところが増えてきました。地方公務員の門戸は大きく開かれているといえます。皆さんの経験や力を、次は地方公務員として地域の課題解決や産業の振興、福祉の推進などに生かされてはいかがでしょうか。試験対策については遠慮なくご相談ください。

むらかみ たて お

村上建夫さん(青年海外協力隊相談役)

担当地域: 熊本

✉ jicakicp-cs3@jica.go.jp



2年間の活動を終えて帰国された方々にお会いすると、表情や態度のみならず考え方や振る舞いなどが出発前とは明らかに違ってきているのを感じます。辛いことや楽しいこと、悔しかったことや嬉しかったことなどがご自身のかけがえのないキャリアとなっているのでしょうか。でも協力隊での2年間の活動より、その後の人生のほうがはるかに長いのです。自分自身の強みや弱みを整理して、将来のご自身をイメージして行動することで、これからのキャリアに差がついてきます。そのお手伝いとして私たちを積極的にご活用していただきたいと思えます。

●経歴: 医療機器販売会社や菓子メーカーで営業・販売・製造などさまざまな職種を経験した後、人のかかわりに楽しさを感じて就職支援の道へ。職業訓練実施指導やメンタルヘルスカウンセラー、各種就職支援セミナーの講師、キャリアコンサルタントの育成指導にもかわる。2014年より現職。産業カウンセラー、1級キャリアコンサルティング技能士。

クロスロード

令和元年7月号 [第55巻第6号 通巻648号]
発行日 令和元年7月1日

編集・発行:
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・
投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 帰国後の就活・進路の悩みをお寄せください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp





CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



活動計画の話し合いが進まず、 悩んでばかりいました。

かわほりほなみ
文=兼堀穂奈美さん

- ▶ ソロモン
- ▶ 環境教育
- ▶ 2017年度1次隊

PROFILE

1994年生まれ、静岡県出身。2013年4月、酪農学園大学環境共生学類野生動物学コースに入学し、野生動物保護管理学を学ぶ。17年3月に卒業し、同大学院酪農学研究科修士課程に進学した後、休学。同年6月、協力隊員としてソロモンに赴任。19年6月に帰国予定。

活動概要

ソロモン森林・研究省国立標本庫・植物園課に配属され、主に以下の活動に従事。

- 環境教育活動の企画・実施
- 配属先が運営する植物園の改善支援
- 配属先が保管する植物標本の管理支援

私の配属先であるソロモン森林・研究省国立標本庫・植物園課は、植物標本庫を兼ねた植物園(以下、「植物園」)を運営・管理する部署。環境教育隊員としては初代の派遣でした。

活動計画表を作成し、上司に提出したのは、着任して3カ月が過ぎたころです。「植物園」でちょうど2つのプロジェクトが始まった時期であり、上司からは「あなたの計画と合わせて、みんなで協力して事業を進めていこう」と言われ、いよいよ活動が始動するとワクワクしました。

ところが、私の活動計画についての話し合いに進展がないまま、3カ月が経過……。あふれるやる気が消化不良となってしまっている状況に、私は考え込むことが多くなっていきました。始動している2つのプロジェクトに携わろうにも、いずれも豊かな知識や技術、経験が求められるものであり、新卒の私にできることはなかなか見出せませんでした。

悩んでばかりの自分が嫌になった私は、「自分にできることは、とにかく何でも実行しよう」と決意。「植物園」内のゴミ拾いや、「植物園」の概要を紹介する冊子の作成と来園者への配布などに取り組みました。すると、当初はひとりで作業していたのですが、次第に同僚たちが手伝ってくれるようになり、やがて彼らだけで進めてくれるようになりました。

任期の残りが半年ほどとなったころには、同僚とその家族が5日にわたって集中的に「植物園」内のゴミ拾

いをする催しが開かれました。1965年に「植物園」が設立されて以来、初の試みとのことでしたが、収集したゴミは大型トラック5台分に。私の小さな活動は無駄ではなかったのだ、私ここに存在する意義があったのだと感じることができた瞬間でした。

私の任期はもうすぐ終了します。思い返せば後悔もありませんが、「後悔」ができるのも、私自身がそのときより成長できているからなのだと思います。

＼YELL!!／

人生で学んできたことすべてが 協力隊活動では役に立つ

協力隊活動では、学んできた専門分野の知識だけでなく、人生で学んできたことすべてが役に立つはず。自分のそれまでの人生に自信を持って、困難を乗り越えてください。



園内の一斉ゴミ拾いで収集したゴミの一部



今月号の表紙
ベトナム



やまだくにはる
文・撮影=山田邦永さん
(ベトナム・マーケティング・2017年度2次隊)

福島県二本松市の菓子職人、松本克久さんと協力し、ゲアン省で葛の粉を使ったクッキーを開発しました。現在は同省のみならず、首都ハノイ市の土産物店でも販売されています。写真は、同市内で販売を行う生産グループのメンバーたちです。開発にあたり、配属先であるベトナム地方産業研究開発研究所、JICAの草の根技術協力事業「ヘリテージツリーズムによる辺境農漁村の生計多様化プロジェクト」、64人のクラウドファンディングサポーターよりご支援をいただきました。